

小枝指館跡

発掘調査報告書

1992-3

秋田県鹿角市教育委員会

序

米代川上流に位置する鹿角市には、60を数える中世の館跡が所在し、秋田県内でも由利地方と共に中世館跡の宝庫として知られています。

この度、平元地区の団体営農道整備事業が計画され、この事業に伴い小枝指館の一部が消失するため、関係機関の協力を得、発掘調査を実施したものです。

その結果、古代の竪穴住居跡や中世の建物跡・空堀と共に、土師器・陶磁器・古銭等の遺物が出土しました。

本報告書は、この成果をまとめたものであります。一資料として活用されるばかりでなく、埋蔵文化財保護への御理解の一助になれば幸いに思います。

最後になりましたが、調査にあたり御指導、御協力くださいました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

鹿角市教育委員会

教育長 杉山新吉

例 言

1. 本報告書は、秋田県鹿角市花輪字平元古館、字館神、字八幡館他に所在する小枝指館跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書の執筆は、調査員・調査補助員が分担し、文責は各々の文末に記した。
3. 遺物の実測、探拓、トレース等の一連の報告書作成作業については、調査員の指示のもとに調査補助員があたった。
4. 資料の鑑定並びに分析は下記の方々に依頼した。

陶磁器鑑定	金沢大学	助教授 佐々木達夫
	青森県浪岡町役場	主査 工藤 清泰
石器類石質鑑定	秋田県立十和田高等学校	教諭 錄田 健一
花粉分析	鹿角市理科教育センター	専任 成田 典彦

5. 土層・土器の色調の記載には、(財)日本色彩研究所「新版標準土色帖」を使用した。
6. 報告書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の「毛馬内」、「花輪」(S:1/2万5千)を使用した。
7. 本報告書に収載した実測図・拓影図の縮尺についてはそれぞれにスケールを付している。なお、写真図版については任意の縮尺とした。
8. 現況図(2)については、昭和56年作成の航空写真測量図を使用し、補測・加筆を行い、トレースした。
9. 本報告書の文中において、用語の主たるものは統一するように努めたが、数度にわたり使用しているものは簡略化している場合もある。
10. 図版等で下記のような記号やスクリーン・トーンを使用した。
S B……建物跡 S D……溝状遺構 S K……土 壤 S I……整穴住居跡
S F……土壘状施設 ……遺構確認面以下の土層 ……焼土・空堀・沢

11. 発掘調査・報告書作成にあたっては、次の諸氏から指導、助言をいただきました。記して感謝の意を表します。(敬称略、順不同)

高橋泰時・桜田 隆・高橋 学(秋田県埋蔵文化財センター)、板橋範芳(大館市教育委員会)、船木義勝(秋田県立博物館)、葛西 効(青森山田高等学校)、佐藤 樹(秋田県文化財保護管理指導員)

本文目次

序

例言

本文目次

図版・P L・表目次

第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と立地	1	3. 遺跡周辺の地形	4
2. 周辺の遺跡	1	4. 遺跡付近の地質	5

第Ⅱ章 遺跡の歴史的背景と現況

1. 小枝指館跡の歴史的背景	6	2. 館跡の現況	16
----------------	---	----------	----

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査に至るまでの経過	26	3. 調査の方法	27
2. 調査要項	26	4. 調査の経過	28

第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物

1. A区の検出遺構と出土遺物

(1) 基本層序	29	(4) 溝状遺構	42
(2) 穫穴住居跡	29	(5) 整地跡・土壘状施設	44
(3) 建物跡	40	(6) 遺構外出土遺物	45

2. B区の検出遺構と出土遺物

(1) 基本層序	46
----------	----

3. C区の検出遺構と出土遺物

(1) 基本層序	47
(2) 溝状遺構	49

(3) 整地跡	49
(4) 遺構外出土遺物	49

4. D区の検出遺構と出土遺物

(1) 基本層序	51
(2) 空堀・土壘	51

(3) 整地跡	53
(4) 遺構外出土遺物	53

5. E区の検出遺構と出土遺物

(1) 基本層序	55
(2) 土壘	59
(3) 溝状遺構	59

(4) 空堀	60
(5) 遺構外出土遺物	61

第V章 自然科学的調査

1. 小枝指館の古環境	62
-------------	----

第VI章 調査のまとめ

63

図版・PL・表目次

図版目次

第1図 小枝指館と周辺の遺跡	2	第20図 第101号建物跡実測図	40
第2図 調査区位置図	3	第21図 第102号建物跡、Pit 1・2	41
第3図 館跡分布図	8	第22図 溝状遺構実測図、西部基本層序	
第4図 小枝指館周辺小字名	15		43
第5図 七館全図(「館址」より)	17	第23図 溝状遺構出土遺物	44
第6図 昭和30年発掘地域実測図(1)	19	第24図 A区遺構外出土遺物(1)	45
第7図 昭和30年発掘地域実測図(2)	21	第25図 A区遺構外出土遺物(2)	46
第8図 昭和30年調査出土遺物	22	第26図 B区トレント土層図	47
第9図 小枝指館周辺切絵図	23	第27図 基本層序・整地跡実測図	48
第10図 小枝指館現況図(1)	24	第28図 第301号溝状遺構・出土遺物	49
第11図 小枝指館現況図(2)	25	第29図 C区遺構外出土遺物	50
第12図 A区遺構配置図	30	第30図 D区遺構配置図・基本層序	52
第13図 第101号竪穴住居跡実測図	31	第31図 D区遺構外出土遺物	54
第14図 第101号竪穴住居跡出土遺物	31	第32図 E区トレント設定図	55
第15図 第102号竪穴住居跡カマド実測図	32	第33図 a・bトレント実測図	56
		第34図 c・d・jトレント実測図	57
第16図 第102号竪穴住居跡出土遺物(1)	34	第35図 e・f・iトレント実測図	57
		第36図 g・h・kトレント	
第17図 第102号竪穴住居跡出土遺物(2)	35	第501号土壤実測図	58
		第37図 E区遺構外出土遺物	61
第18図 第102号竪穴住居跡出土遺物(3)		第38図 採取層序と採取番号	62
第103号竪穴住居跡出土遺物	36		
第19図 第103号・104号竪穴住居跡			
カマド実測図	38		

PL目次

PL 1 小枝指館跡	66	PL 3 館跡全景・各郭	68
PL 2 小枝指館全景	67	PL 4 各郭・作業風景	69

P L 5	A区堅穴住居跡	70	P L12	a～d・j トレンチ、溝状遺構	77
P L 6	A区堅穴住居跡・建物跡・溝状遺構		P L13	e～h・k トレンチ	78
		71	P L14	出土遺物(1)	79
P L 7	第102号建物跡	72	P L15	出土遺物(2)	80
P L 8	A区西端部、B区トレンチ	73	P L16	出土遺物(3)	81
P L 9	B区・C区全景、溝状遺構	74	P L17	出土遺物(4)	82
P L10	D区全景、第402号空堀	75	P L18	出土遺物(5)	83
P L11	第402号空堀、第II郭上面	76	P L19	出土遺物(6)	84

表 目 次

第1表 小枝指館周辺の遺跡一覧表 3 第2表 検出された花粉化石の固体数 ... 62

第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と立地

鹿角市は秋田県の北東部に位置し、岩手県と県境を接している。

鹿角盆地は、東側の奥羽山脈、西側の高森山地に挟まれた南北に長い盆地で、米代川とその支流によって形成された段丘、舌状台地が発達している。

この段丘、台地上には多くの遺跡が分布している。小枝指館跡もその一つで、別称「七ツ館」とも呼ばれ、以前より周知されている。

小枝指館は、鹿角市花輪字平元古館・字館神・字八幡館他に所在し、JR東日本・十和田南駅の南東2km、小枝指集落の南側後方台地に位置し、米代川の支流である寺鉢川と間瀬川の浸食によって形成された標高145～150mの舌状台地の先端部～中央部を占めている。

本館跡は、郭・腰郭・空堀・土塁等から構成され、郭上面、腰郭は畑地や果樹園（リンゴ）として利用されるほか、空堀、郭斜面には杉が植栽されている。

調査区は、館跡の南側に沿って5ヶ所に分散しており、各調査区を西端から便宜上A～E区と呼んだ。A区は第Ⅰ郭南西側の腰郭部分、B区は第Ⅰ郭南側部分に位置する。C区は第Ⅱ郭下段、D区は第Ⅱ郭東側帶郭及び空堀部分、E区は第Ⅲ郭東側の空堀から隣接する台地（小字名上ワ町）上面に位置する。

小枝指館については、昭和30年に東京大学東洋文化研究所が発掘調査を実施し、多大なる成果を収めて、同33年に『館址』として報告書が刊行されている。この成果については、第Ⅱ章2にその概要と実測図を収載した。

（藤井安正）

2. 周辺の遺跡

山脈と山地に挟まれた南北に細長い鹿角盆地は、貢流する米代川とその支流によって形成された段丘、舌状台地が発達している。この台地上には、平成元年度の詳細分布調査により416ヶ所の遺跡が確認されている。特に米代川右岸の八幡平小豆沢地区から大湯環状列石周辺地区にかけては分布密度が高い。

これまでに、東北縦貫自動車道等の建設に伴って発掘調査された遺跡は60ヶ所余りに及んでいる。ここでは小枝指館跡を中心に周辺の遺跡をみていきたい。

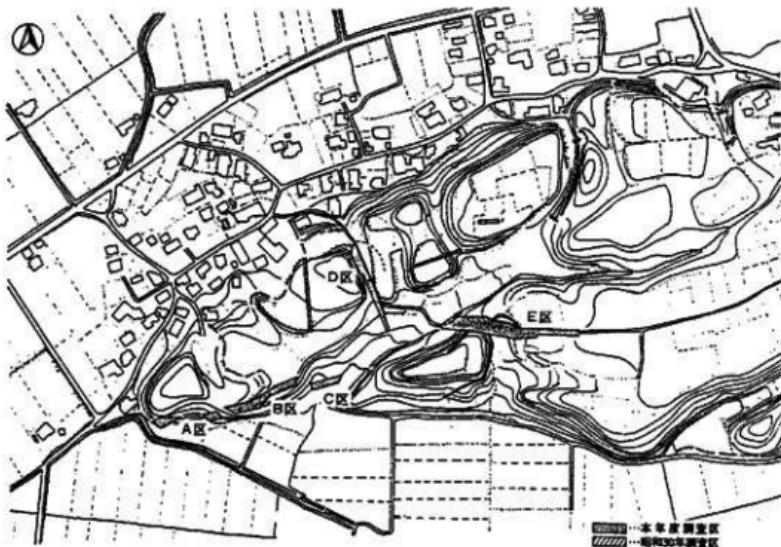
縄文時代では、本遺跡の北東3kmの地点に所在する特別史跡大湯環状列石（第1図②、以下同じ）があり、昭和59年より発掘調査が継続されている。これまでの調査では配石遺構群・フ拉斯コ状土壙のほか、万座環状列石近傍からの建物跡、環状配石遺構等が検出され、これと共に多量の土器・石器・土製品等が出土している。本年度調査は、両環状列石の南側に調査区を



第1図 小枝指館と周辺の遺跡

No.	遺跡名	所 在 地	遺跡の種類	時 代	遺構・遺物	備 考
1	柏崎館	鹿角市十和田毛馬内字柏崎他	館跡・土城	繩・弓・箭	郭、空堀、土塁、土壁	「柏崎館」鹿角市教委 1989 他
2	大湯環状列石	・ 十和田大湯字万座、野中堂 他	配石遺構群	縄・平	配石遺構、豊六住居跡	「大湯町環状列石」文化財保護委員会 1953 他
3	丸 築	・ 十和田草木字丸畠表 8 他	館跡・集落	平・中世	郭、竪穴住居跡	「鹿角市小坂町大規模農道報告書」秋田県教委 1973
4	枯草坂	・ 十和田草木字曲谷地	古 墓	秦 ~ 平	古墳、玉盤	「秋田県の考古学」奈良輝介 吉川弘文館 1987
5	一ノ森館	・ 花輪字一ヶ森、押通沢	館 跡	縄・中世	郭、空堀、繩文土器	「一ノ森館」秋田県教委 1990 他
6	鳥 野	・ 花輪平元字鳥野	集 落	平 安	豊六住居跡	「鳥野遺跡」秋田県教委 1978
7	源 田 平 野	・ 花輪平元字源田平	集 落	平 安	豊六住居跡	「鳥野遺跡」に収載
8	小枝指館	・ 花輪字平元古館、越神 他	館 跡	中世	郭、竪穴住居跡、陶器器	「新斗米館跡 I・II」鹿角市教委 1980、1981 他
9	新 斗 米 館	・ 花輪字新斗米、大坊沢 他	館 跡	中世	郭	「新斗米館跡 I・II」鹿角市教委 1980、1981 他
10	小 平	・ 花輪字八幡平10-3 他	集 落	平 安	豊六住居跡	「小平遺跡」鹿角市教委 1979
11	高 市 向 館	・ 花輪字高市向5-1 他	館跡・集落	平 中世	郭、竪穴住居跡	「高市向館跡」鹿角市教委 1982
12	太 田 谷 地 館	・ 花輪字中畠	集 落	平 安	豊六住居跡、空堀	「太田谷地館 I・II」秋田県教委 1988、1989
13	高 里 館	・ 花輪字慈ヶ沢 他	館 跡	縄・近世	郭、配石遺構群	「高里館」秋田県教委 1990

第1表 小枝指館周辺の遺跡一覧表



第2図 調査区位置図

S : 1/2,500

移し、配石遺構群、フ拉斯コ状土壙群を確認した。

この他に注目された遺跡としては、平成元年秋田県教育委員会によって調査された高屋館跡③がある。環状列石とこれを取り囲む建物跡群が確認され、大湯環状列石と同様に縄文時代の精神文化を考える上で貴重な資料を提示した。

弥生時代単独の遺跡の調査例は現在のところない。諸遺跡調査の際に土器破片が散見する程度である。これらの土器は、撫糸文系の土器である小坂X式または弥生後期の特徴をもつもので、柏崎館跡①、当麻館跡等より出土している。

古代（奈良・平安時代）に入ると遺跡・調査例を増す。小枝指館後方に続く台地上には、鳥野遺跡⑥、源田平IV遺跡⑦が、同台地南側の沢を隔てて対峙する台地上には小平遺跡⑩がある。特に鳥野遺跡出土の土器器表は頸部に段をもつなど市内でも古いものに属するものである。また小枝指館と米代川を挟んで位置する尾根状台地には、太田谷地館跡⑪、堪忍沢遺跡がある。太田谷地館跡は、空堀と急斜面によって区画された台地突端部に住居をのせるといった「集落堡塞的」館の要素を持つものとして注目されている。堪忍沢遺跡では製鉄炉のほか鍛冶工房の可能性をもつ豊穴住居跡が検出され、鉄製品の流通や製鉄技術を考える上で貴重な資料を提示した。

中世（鎌倉～室町時代）の遺跡としては、「鹿角四十二館」もしくは「四十八館」といわれるよう舌状台地先端に位置する館跡がある。昭和30年の東京大学東洋文化研究所による小枝指館跡の調査は、豊穴住居跡・陶磁器・古銭等の検出・出土といった多大なる成果と、館跡調査の初例として大きな足跡を残した。昭和56年から5ヶ年にわたって鹿角市教育委員会が実施した「館跡航空写真測量調査」は、中世文書の少ない当地方の歴史を解明する上で、「館址」とともに重要な資料となっている。

（藤井安正）

3. 遺跡周辺の地形

小枝指館のある台地は鹿角盆地の中央部の東側に位置する。このあたりの地形は米代川の沖積低地、十和田火山起源の台地、奥羽山系の西麓に広がる丘陵地及び扇状地などがある。米代川の沖積地が流路沿いに南北にのびているのに直交するように数本の舌状台地とその間の沖積低地がのびており、本台地のすぐ南側には幅150m～200mの沖積低地を隔てて小平館、新斗米館舌状台地が広がっている。北の一つ森館のある台地とともに、これらは開析による浸食谷が形成される以前は南北に広がる鳥越段丘面に連続する。

小枝指台地は標高約150mであり、南側の低地との比高は約15mあり、先端部ほど小さい傾向がある。鳥越段丘面は小坂地域で標高200m、毛馬内地域で160～170m、本地域で150mである。この面は内藤(1966)により、約12,000年前の十和田火山の噴出物である火碎物などから

構成されている。大湯～毛馬内にかけては鳥越面の上に二次的に形成された、ほぼ水平な砂礫を主とする層（関上面）が見られるが、本地域では欠けている。

4. 遺跡付近の地質

地層の状況は、各館の構造において一部は自然の地形を利用しているものの、塙は人工構築によるものと考えられ、削除された土壤により、とくに塙の底では地層の逆転が認められて複雑である。しかし、館のある台地は急峻であり、表面の風化土壤を削削することによって容易に新鮮な面を調査することができた。下部は典型的な鳥越火山灰層である。中に拳大の白色～灰白軽石を含んだ乳白色火山灰層である。上部ほど火山灰をシート状に挟み、また軽石と火山灰の互層状を示すところもある。上位は少し黄褐色ぎみであり、岩片を比較的多く含む。最上位は黒色腐植土層であり、中に一部、数cmの大湯軽石を含む。

(鎌田健一)

第Ⅱ章 遺跡の歴史的背景と現況

1. 小枝指館跡の歴史的背景

小枝指館は、別に七ツ館ともよばれ、鹿角盆地の米代川右岸に発達する東部台地から、西へ細長くのびた比高約20メートルの舌状台地を区切る、7つの郭から成っている。北側の館下には小枝指村の古い集落が発達していて、おそらくこの村が館主小枝指氏の名字の地、本貫の地であったとみられる。

この平山城の形態をもつ、多郭連続式の館が、いつの時代につくられまたどのような変遷をたどってきたのか、今のところあまり知られていない。しかし幸いなことにこの館は、昭和30年4月に東京大学東洋文化研究所による発掘調査が行われ、その調査結果が報告書(注1)として発表されている。この小枝指館造営はいつの時代に始まったのかについて、同報告書はなんら触れてはいないが、その「総括」のなかで「出土遺物は、平安時代ごろに属するものも、室町・桃山時代ごろに属するものも、当時の日本全体に普遍的なものを以て主体としているようで、特に蝦夷的あるいはアイヌ的と認められるものはない」とした上で、次の所見が述べられている。すなわち、東北地方の特徴的で固有の遺跡といえば館址であり「館の遺址は、北海道のチャシと全く同類で、その分布範囲は、まだ調査不充分の憾みはあるが、だいたい蝦夷地と一致していることは否定できないようである」としている。このことは、現存する館跡の古いものの中には、築造年代の上限を、古代において蝦夷がチャシとして築いた時点にまで遡らせて考えることができるという、可能性を示唆しているように思われる。このことから中世になって関東武士の分流たちが、小地頭としてそれぞれの村落に換るとともに、初めチャシであったものを、二次的、三次的に改造し補強して、自らの居館を営んだのではなかろうかと推測される。

上記の発掘調査は、2週間という短期間であったため、7つの郭のうちの3郭について、いずれも幅1~2メートルのトレンチ掘を行ったにすぎなかったが、第Ⅱ郭の上面から9ツの住居跡、第Ⅲ郭から5ツ、第Ⅳ郭から6ツの住居跡が発見された。同報告書は「この館の上にはある期間にわたって、かなり多数の竪穴住居が営まれたことは確実であろう」とし、さらに「七館遺跡では、われわれの調査した限りでは、竪穴住居址は館址の内部にのみあって、外部ではない。このような点から観察して、おそらく七館は、一朝有事の際たてこもるために逃城的な堡塞というよりも、むしろそれ自体に集落を内包した堡塞と認むべきであろう。こうした集落堡塞の存在が七館の遺跡でうかがわれ、鹿角地方の他の多くの館址の場合も同様であったろうと推測されることは、当時のこの地方の集落の性格や成立の事情を考える上に重要な手がかりとなろう。要するに、七館の遺跡は多郭連続形式の館址で、しかも竪穴住居を内包した集落堡塞の遺跡であった」と、その性格を明らかにしている。とくに興味深いことは、七ツ館のよう

な多郭連続式、豎穴住居を内包した集落堡塞の遺跡は、まったく同類の遺跡として、遠くロシアからバルト海沿海地方のスラヴ人の集落跡ゴロディシチに見出されると、指摘されていることである。

またこの館の年代については、中国明末の青磁やわが国桃山時代の陶磁器、あるいは内耳鍋などから、報告書は「七館遺跡の豎穴の年代が室町・桃山時代頃まで降るものであることは、そこから出土した鉄器・陶磁器・古銭などの考察からほとんど疑いないが、その年代観は館や塙溝についても該当するものであろう」とし、次いで「このように七館が室町・桃山時代頃まで年代が降るものとすると、米代川流域の鹿角盆地にある他の類似の館址一いわゆる鹿角四十二館あるいは四十八館一の年代も、ほぼ相応いものであることが推測される」と述べている。

鹿角の館の分布において、きわだった特徴の一つと思われることは、その館と館の距離がきわめて近いことである。第3図「館跡分布図」についていえば丸館と一つ森館の間約600メートル、一つ森館と小枝指館の間約500メートル、小枝指館と小平館の間約200メートル、小平館と新斗米館の間約60メートル、新斗米館と高市館の間約300メートル、高市館と柴内館の間約1300メートルとなる。高市館と柴内館の間には、万谷野館と地羅野館がはいる。他の地区でも、例えば柴内館と乳牛館、黒土館と花輪古館などは殆んど隣接しており、中間の郭をどちらの館に属せしむべきか迷わざるを得ない程である。

このような館と館の関係は、一体なにを意味するものなのか、館の歴史的背景をさぐる上でも、大きな問題点であろうと考えられる。鹿角盆地においては、古い村には必ず館跡があり、いわば一村一館の形態がとられている。その館と館がきわめて近接していることは、まったくの予想であるが、相互の館主が同族関係にあるか、一種の同盟関係にあったからであろうと思われる。それは小さな盆地のなかにひしめきあう同族的地侍たちが、絶えず盆地への侵略をねらう南部、安東、浅利氏ら強豪勢力に対して、連合提携して対抗せざるを得ない情勢が永年にわたって続いてきた結果とみられる。

小枝指氏の初見は、近世津軽藩の編纂した「津軽一統志」に「天文十五年造文」（あるいは、天文五年とも）として「郡中名字」が載せられ、そのなかにあげられた鹿角郡内4人の国人の分れとしてある。これはまた残存史料としては鹿角四頭の初見である。即ち、

鹿角三百町ハ四人ノ国人也、所謂奈良・成田・阿部・秋元四人ナリ、奈良ハ大湯・小坂・小平・小江刺、四人ニ分ル、成田ハ田内・夏井・名越・三ヶ田・猿雄、五人ニ分ル、阿部ハ大里・柴内・鼻和、三ヶ所ニ分ル、丹治氏ト云、秋元ハ高瀬・長内・小猿辺、三ヶ所ニ分ル、公任卿ノ末孫也

と記されている。小枝指は「小江刺」と表現され、鹿角四頭のうち奈良氏の一族であった。

鹿角四頭はいづれも関東武士団の出身で、奈良氏は旧武藏国幡羅郡成田郷より起こった成田



第3図 館跡分布図

氏の出、「成田系図」によれば式部大輔助隆の長男は成田太郎助広、二男は別府二郎行隆、三男は奈良三郎高長、四男は玉井四郎助実と名のり、代々成田四家と称された。「保元物語」白河夜討に別府次郎・奈良三郎・玉井四郎の名が、また「吾妻鏡」承久の乱の条に鎌倉方として奈良兵衛尉、奈良五郎、奈良左近将監等の名が見えることで知られる。その奈良氏が、いつ、どのような経緯で鹿角郡内に所領を得たのかは明らかでない。大まかに承久の乱以後、鎌倉時代後半であろうといわれるが、その根本史料を欠いている。成田・安保二氏については文保二年（1318）関東下知状（『安保文書』）、正中二年（1325）安保信阿譲状案（『八坂神社文書』）にそれぞれ鹿角郡所領のことがみえるが、奈良氏と秋元氏に関するこのような文書は残っていない。推測するところ、奈良氏の場合、奈良氏単独で所領を得たというより、成田氏がその庶流または被官をこの地に派して経営に当たらせた際に、奈良氏は成田氏一族として下向し、その後において独立的形態をとるに至ったことも考えられる。

鹿角奈良氏は「鹿角由来記」によれば、惣領は大湯村を領し、支族は分かれて小平村、小枝指村、新斗米村、草木村、瀬田石村、芦名沢村に住し、それぞれに館を有したという。同書に

- 一 大湯村、大湯左エ門家來領地本名奈良の惣領也、嫡子四郎左エ門二男治郎左エ門三男彦左エ門、右四郎左エ門天正十九年九戸へ一味仕被生捕九戸と一緒に三迫にて切腹（略）。
- 一 小枝指村、小枝差左馬領知本名奈良也、館有。
- 一 小平村、小平彦次郎領知本名奈良也、小枝指之末弟也、館有。
- 一 新斗米村、新斗米左近領知本名奈良、館有。
- 一 瀬田石村、瀬田石太郎左エ門領知、館有本名奈良、後に毛馬内大学領知（略）。
- 一 芦名沢村、芦名沢太郎兵工領知本名奈良、館有、式部の館、芦名沢観音札所也。
- 一 草木村、奈良越後領知寺坂室田、居館丸館也。

と記されている。小枝指について類本「鹿角由来記」には「一 小枝指村、小枝指左馬助領名字奈良、大湯佐左エ門督次男」とあり、「鹿角郡旧記」も殆ど同様に「一 小枝指村は小枝指左馬助領、本名奈良氏大湯左衛門督ニ男次郎左衛門也」としている。

以上からみると、奈良一族はほぼ鹿角郡北東部に蠶踞して、威を振っていたことになる。大湯館は小枝指館の北東約6,000mを距て、その間に草木川（その下流根市川となる）に臨む丸館が置かれ、小平館、新斗米館は小枝指館の南200mの近距離で隣接している。芦名沢館は大湯館の北7,000m、瀬田石館のみ小坂川の西岸に分離している。

なお、小枝指館の北側に一つ森館がある。一つ森館が館跡として確認されたのはごく近年のことであり、それまで地域の人たちにも館としての認識がなく、館主については勿論のこと、館名すらも語り伝えるところがなかった。調査にあたりやむを得ず字名を冠して一つ森館としたが、小枝指館の至近距離にあって、東西800メートル、南北の幅100～300メートルをはかり、

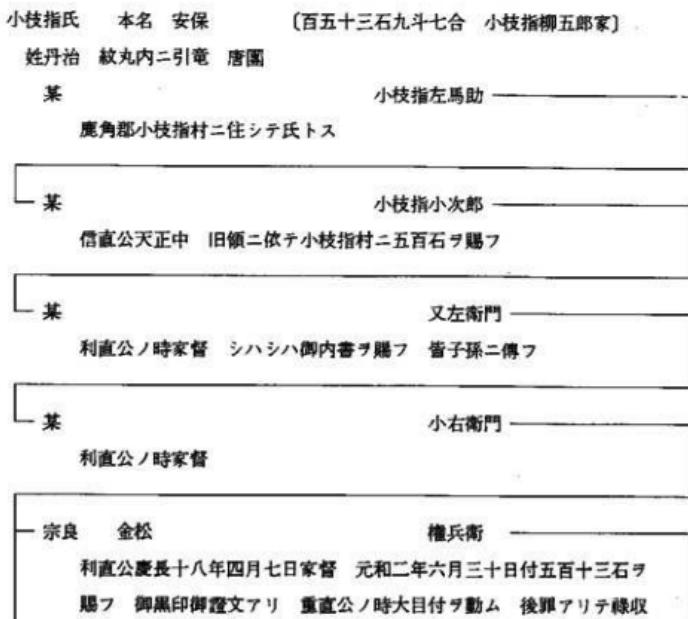
かつ大小11の郭によって構成される堂々たる館跡である。北側低地に町端、下野の地名を、南側低地に館下タの地名をもつこの古い館跡には、奈良一族にあって唯一近世盛岡藩に高祿を得て抱えられ、後世に生きのびた小枝指氏の軌跡が隠されているかに見える。

鹿角の御史類例えば「鹿角由来記」「鹿角由来集」「鹿角記」「鹿角郡旧記」等ことごとく小枝指氏奈良姓と述べてあるのに対し、「岩手県史」は系譜考、奥南落穂集を參取し、小枝指氏安保姓とする次のような小枝指氏系図を掲げている。

小枝指宗完 —— 知宗 —— 茂宗 —— 宗勝 —— 宗良 —— 宗嘉
黒角小枝指村士保氏 仕官直五〇〇石 五〇〇石仕官直 五〇〇石 五〇三石 小枝指又左衛門
左馬助社時政五〇〇石 小枝指小次郎 小枝指又左衛門 小枝指小右衛門 小枝指柳五郎家

いずれが真なのかにわからず、ここにも戦国期において鹿角地土の大半が三戸南部氏に反抗し続けた状況のなかから、近世に生き残った同氏の苦悩が秘められているようにも思われてくる。

なお、盛岡藩「参考諸家系図」には小枝指氏の系譜を、次のように掲げている。



ラル

宗定

小枝指善右衛門

重直公慶安三年間十月五日召出サレ 別ニ百石ヲ賜フ 明暦一
九月九日夭死 祖収ラレ断絶

宗嘉 或宗政

小枝指又左衛門

重信公寛文中頃ニ依テ小枝指村ニ知行新田五十石ヲ賜フ

妻 円子惣五郎定親女

女 玉山六兵衛秀久妻

女 石井兵太夫光蔵妻

能宗 清兵衛

又左衛門

母円子氏 下同

重信公ノ時家督 延宝六年六月足高新田五十石ヲ賜フ 合百石 元藤

五年五月百石御加増 合二百石御者頭ヲ勤ム 又鹿角御郡代トナル

利幹公宝永六年三月致仕シテ宗闇ト号ス

妻 川村善兵衛女

後妻 細越嘉右衛門昌廣妹

宗貞 小枝指金助 別系

女 下田重右衛門政祥妻

女 吉田嘉右衛門義易妻

女 柴内作右衛門久正妻

女 鹿角古人乳井空兵衛妻

永暦・天正期の激動のなかで、いわゆる鹿角四頭の系譜をひく土豪たちがつぎつぎに鹿角の地を去った。奈良姓惣領といわれる大湯五兵衛家のぞいては、ひとり小枝指氏だけが中世伝来の本貫地、旧領小枝指村をそのまま近世に引継いだことは、まことに異例といわねばならない。その理由はなんであったのか、永暦以来終始南部信直方に立って活動した功績によるものであるとしても、上記系図の又左衛門宗嘉の譜にいう利直より「屢々御内書ヲ賜フ」とある。その御内書の今は知るべくもない内容などにも関心がもたれるのである。

また同じく上記系図によって、小枝指氏は、盛岡藩士となったのちも鹿角との深い因縁をもちつづけていたことが知られる。又左衛門宗嘉の妻は円子惣五郎定親の女(むすめ)であり、円

子氏は鹿角郡花輪村に代々住した安保姓花輪氏、花輪伯耆親行の子帶刀延親は天正年中南部信直によって榎部郡九戸の内円子村に移され二百石を与えられ、のち円子氏と改めた。延親の子惣五郎定親は慶長六年三月岩崎陣で戦功を立てたことで聞え、妻は同じ安保一族尾去越中の女である。その子が惣五郎儀武、その長女は小枝指又左衛門宗嘉の妻となり、次女は花輪城代大光寺儀太夫正徳に嫁している。又左衛門宗嘉の子又左衛門能宗は、二百石の祿高を得て者頭を勤めたのち鹿角郡代になるという。この鹿角郡代云々は、実は小枝指氏都代就任の藩記録がなく、花輪通代官となったことの誤伝によるものと思われる。能宗の妻は花巻住の川村善兵衛の女、その三女は柴内作右衛門久正に嫁している。柴内氏は花輪・円子氏と同じ安保姓、代々柴内村の地主、久正の父六右衛門久治は松山御番を勤め、その母もまた小枝指氏の出である。能宗四女は鹿角古人乳井平兵衛妻とみえている。これらの旧鹿角地主との関係は、とりもなおきず鹿角小枝指村在館当時からの深い因縁の延長と考えるべきであろう。小枝指氏が、鹿角に伝わる史書には奈良姓として語られながら、藩庁提出の系図に安保姓と記されている理由には、あるいは上記のような安保姓花輪・円子氏、柴内氏との縁の重なりがあるからなのかも知れない。

小枝指氏が史書に散見するのは、永祿（1558～1569）から天正（1573～1591）へかけての時期である。「鹿角由来集」の小枝指氏関係の項を抄出すると、

- 一 鹿角郡ニテ永祿元年六月秋田城之助殿親近季比内郡ノ主浅利殿ヲ頼鹿角郡之侍ニ見参被成度と被仰候而浅利殿御才覚ニ鹿角五人之侍共ニ見参ニ可參と同心申候浅利殿被仰候者御同心之上ハ互ニ両境ニ而見参可然と被仰候而則鹿角より大湯四良左衛門小平彦四郎柴内弥治郎花輪中務大里豊前土深井ヲ越候而秋田よりハ近季名代大高筑前大浦継助無仁内久藏同名牛右エ門四人ハ比内領猿田川越中ノたにて致見参候其時小枝指又左衛門親小治郎見参股ニ酌ニ立申候時大高筑前方より小枝指小治郎ニ協指引出物ニ被申候
- 一 永祿八年七月頃鹿角侍に邇文ニ加判仕候仁大里備中花輪柴内相模守此三人安保衆と申候尾去之安保左衛門太夫小平大湯此者共ニ御座候
- 一 加判にのり不申もの鹿角旗頭石鳥屋九郎正友長牛継助谷内彈正小枝指左馬助毛馬内此衆申候ハ先祖ノ家督主君信直様逆心仕間敷連判不仕候
- 一 小枝指左馬助近季戰ニ津軽江落申候信直御召本知小枝指被下候事

即ち永祿年間の秋田愛季による鹿角侵攻に際し、奈良一族は惣領大湯を初め小平、小枝指、各氏が秋田氏に加担したが、のち小枝指左馬助は南部方に転じて、一時津軽に落ちたが、争乱後信直に召返され本領小枝指村を安堵されたと伝えられる。

その後天正期においても鹿角郡の地主は南部氏の勢威に服する者とならざる者とに分れ、絶えず鬱動を続ける。天正十三年（1585）と推定される年の五月、秋田愛季から大湯氏に宛てて「榎野部進発ニ付テ波岡、大光寺御難儀之由ニ候先ヅ以テ其ノ郡ヨリ一勢ヲ与力申サレ候而然

ル可ク候是ヨリモ近々鉄炮射チ共差越ス可ク候」云々の書状が送られている。(「青森県史」)。愛季の策として南部氏の津軽進発あらば大浦為信を援護し挾撃の態勢に出るべく、大湯氏への内応を促してきたものであろう。後年大湯氏の庶流が津軽に召抱えられる因縁もこのような関係から生じたのである。また天正十六年(1588)、南部氏の比内大館城攻略軍の中に、大湯四郎左衛門同五兵衛尉の名がみえる(「奥羽永慶軍記」)。天正十九年(1591)、大湯四郎左衛門昌次は大湯鹿鳴城に籠城して大光寺正親の包囲軍と戦い、のち九戸城に入って奥州仕置軍に抗し、捕えられて九戸政実らと栗原郡三迫に誅された。「大湯氏系図」によれば、昌次の子次郎右衛門昌吉、彦右衛門昌致と共に津軽へ出奔して津軽氏に仕え、昌次の兄で大湯二千石の嫡系彦六(五兵衛)昌忠家は存続している。このような経緯の中で、支族小枝指氏はどのような行動をとったか明らかでないが、信直、利直以降も南部藩士として引き続き家祿を維持しているのがとりわけ注目される。

小枝指館は、戦国動乱の世にあって、他の鹿角地主と同じように南部氏、秋田氏、浅利氏諸勢力の激突する中で、辛うじて伝来の地を守り続けた苦悩をその壕溝の深さに留めている。

岩泉家文書(「毛馬内御上資料(2)」所収)「三戸御在城之御館持古館之事」の、鹿角郡内10館のうち「一 小枝指 三百石小枝指小次郎」が記され、慶長支配帳なるものの中にも鹿角6館のうち「二百石小枝指小四郎 小枝指館」の名があげられている。前者は石高制実施以前の矛盾をもち、後者は人名が紛らわしくいざれも後世の推測による記録とされる。

天正二十年(1592)六月に書き上げられた「南部大膳大夫分國之内諸城破却共書上之事」に見られる四十八ヶ城の内破却三十六ヶ城の中には鹿角の館名は見えず、存置十二城の内に毛馬内城と花輪城の二つが上げられている。いわゆる鹿角四十二館の大半は、それ以前に破却されていたのである。これらの館崩しについて、「鹿角由来集」は次の如く述べている。「一 天正十九年辛卯九戸陣落居之時浅野弾正御家來内山助右衛門被仰付南部中館崩ニ遭被申候(略)」、「一 慶長十一年夏桜庭安房守追而館崩御延シ被成候先年内山助右衛門連候時急用ニ付罷登り相残所有之付安房被遣候(略)」。すなわち天正十九年の館崩しで残ったところは、慶長十一年(1606)桜庭安房の手により毛馬内、花輪、長牛の三城を除き悉く破却したのである。小枝指氏は南部藩士として盛岡城下に移り、知行地の年貢米収納等は給所肝入に当たらせ、再び小枝指館に住むことはなかった。近世末天保十年(1839)における小枝指氏の給所は次の通りである(「南部盛岡藩諸士御給人等知行所書上」)。

一 高式百參石九升七合 小枝指良右衛門

内一 五拾五石五斗八升四合 毛馬内通 小枝指村

一 五拾參石五斗六升五合 同 通 高市村

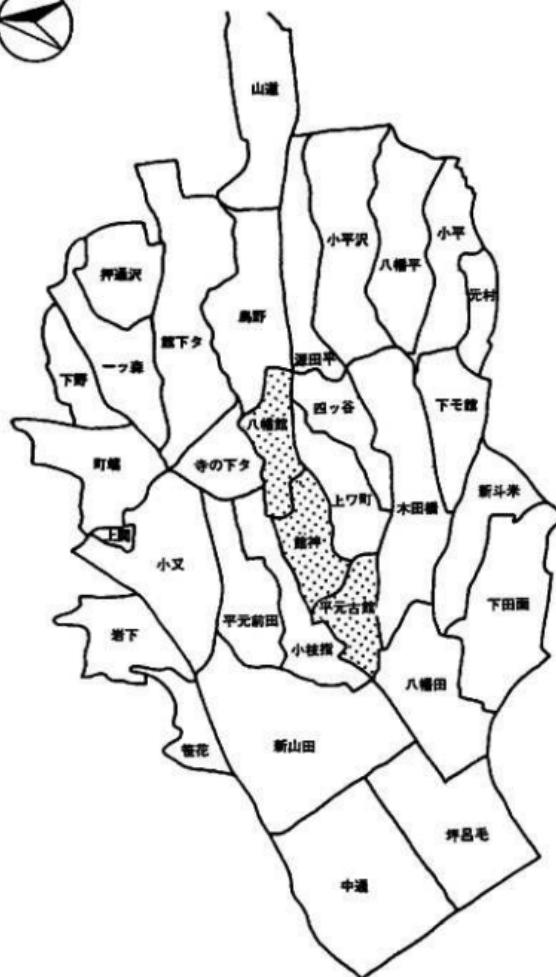
一 四拾九石九斗九升九合 同 通 新斗米村

一 拾五石七斗五升六合	同 通 露田村
一 武石壱斗九升	同 通 柴内村
一 武拾六石參斗九升九合	花輪通 高屋村

現在小枝指館跡は、字古館、字館神、字上ワ町、字四ツ谷、字八幡館の広い範囲にわたっている。字古館は西へ突出した先端部を占めているが、いくつもの郭が連続するなかで、その西端部だけがとくに古館とよばれなければならない理由はみつからない。古館・新館といった対象呼称ではなく、もともと館跡全体を古館とよんでいたのが、周りの字名との関連から西端部に局限してこのように名づけられたものと思われる。字館神はこの館のおそらく主郭の位置にあっただろうとされる第IV郭を含んでいる。この第IV郭には近年まで館神（八幡宮）が鎮座していたが現在、館神その他の社堂は北側低地の集落市道わきに移されてしまった。そのまた東側に字八幡館が集落を包んで広がる。八幡館の名は、台上の北縁部に旧村社の小枝指八幡神社が鎮座していることから起こっている。八幡神社は拝殿が間口3間に奥行4間、本殿が1間四方の規模をもち、由緒には延宝元年小枝指又左衛門再建と伝えられている。さらに小枝指又左衛門は延宝3年白根金山にあった隆昌寺を小枝指村に移し、八幡神社の西側（第V郭の中段）に伽藍を建立した。曹洞宗通幻派小枝山隆昌寺を称し、白根金山師青山庄左衛門と同銅山師山ノ目小平治の位牌が、今なお開山堂に安置されている。

字八幡館の南側に、浅い沢合をへだて字上ワ町と字四ツ谷がある。上ワ町はかつて小枝指氏家中の侍屋敷のあった区域と推定され、四ツ谷は四ツ屋の意でもと四軒の家があつたことを意味した地名であろう。四ツ谷の雜木林にかこまれた小丘の上に3基の古い墓石がたち、風化のため碑名は読みとれないものの、小枝指氏の墓と伝えている。明治の頃まで字八幡館地内に小枝指氏の給所における邸宅、いわゆる田屋があつて田屋敷とよばれていたという。

この度の発掘調査で、字上ワ町台地とその西端部の第V郭との間の塹地、もとは両者を区切る空堀のあとでその後作場道となっていた塹地の東側斜面に、複雑に地山を掘りくぼめた壕穴と細流を導き入れたともみられる曲りくねった小溝状の遺構が見出された。これまで例をみない遺構で、いかなる用途のものか未だに考えおよばないのである。もしここで勝手な想像を許してもらえるならば、江戸期に館神のおかれていた第IV郭の北下タ道路わきに、3社の合祀された小じんまりとしたま新しいお堂があり、その神額のまん中には白龍神社、むかって左に千手観音社、右に馬頭観音社と書かれている。以前には第IV郭の上面に千手観音堂が祀られていたという。この地域では、千手観音信仰は金山と深く結びついていたと思われ、白根金山観音堂（現毛馬内管願寺千手観音堂）、大欠観音堂、雁屋観音堂、柴内観音堂などにその例をみる。小枝指村の東方には奥羽山脈の山並みが連なり、その裾に今も金・銅の旧坑跡が数多くみられ



※スクリーン・トーン内が
小枝指館



第4図 小枝指館周辺小字名

るという。後年のこととはい小枝指又左衛門が白根金山から隆昌寺を移していること、天正・慶長の頃小枝指氏のみが他の鹿角地主にくらべ南部氏の破格の扱いをうけていること等を思い合わせると、前記の複雑な遺構はあるいは原始的な採金法、金鉱を碎いて粉にし、汰（ゆり）板でねこ流しにかけて金をとるといった作業工程の場であったかも知れないなどと考えるのは、あまりに空想に過ぎるとの誇（そし）りを受けることになろうか。いずれにしても、館個々の特異な遺構は、館そのものの歴史的背景とともに館主の活動の実像を重ね合せながら、解き明かさねばならないもののように思われる。

注1 「館址・東北地方における集落址の研究」江上波夫・関野雄・桜井清彦編、1958年、東京大学出版会。

（安村二郎）

2. 館跡の現況

舌状台地先端には、地形を巧みに利用し、空堀によって区切られた多郭連続式の館跡が築かれている。平成元年の遺跡詳細分布調査によって確認された館跡は60ヶ所にも及ぶ。

小枝指館は接近した2つの舌状台地を利用している。館は空堀、沢によって区切られる東西方向に並んだ7つの郭と、深い沢を挟んで対峙する1つの郭の8つの郭から構成されている。

小枝指館の規模は、東西716m、南北279mを測り、郭上面の標高は147～151mで、付近水田との比高差は18～22m程を測る。

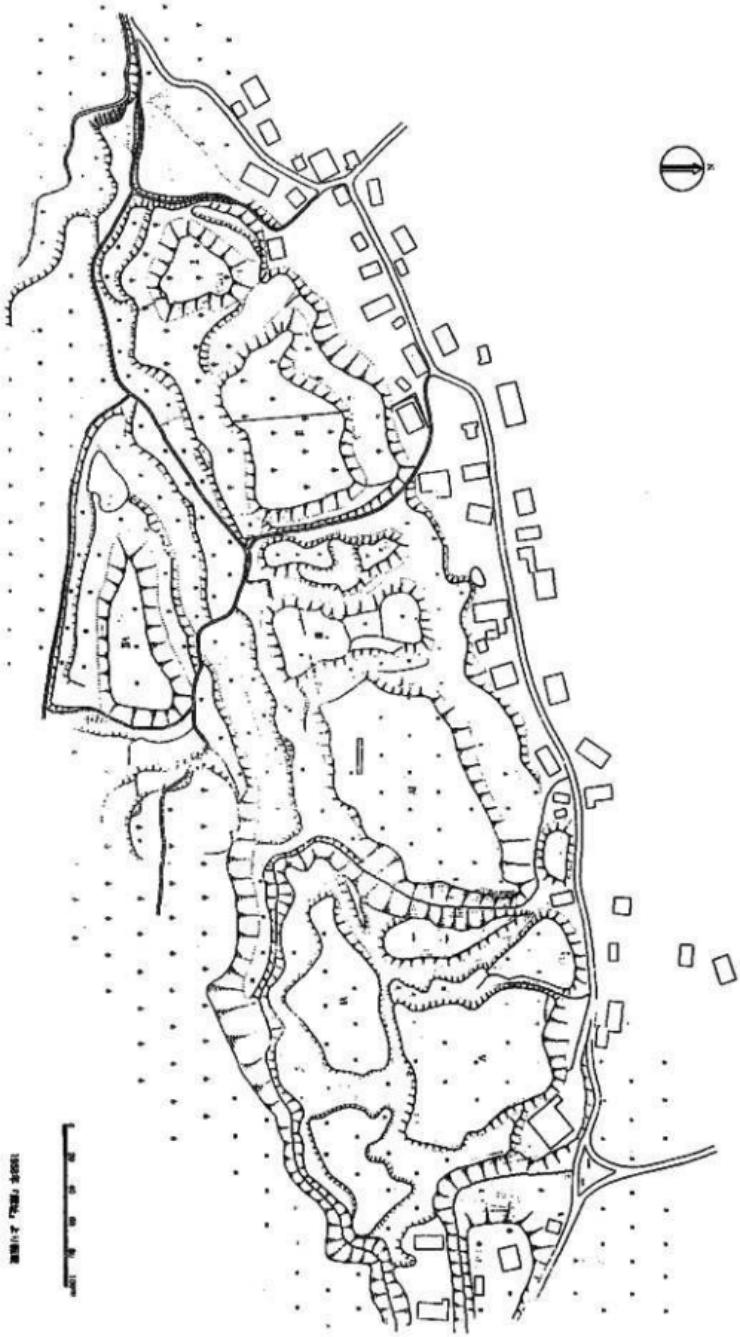
本館跡については、昭和30年に東京大学東洋文化研究所が発掘調査を、同56年に鹿角市教育委員会が航空写真測量調査を実施し、「館址」・「鹿角の館(1)」としてそれぞれ刊行している。

各郭については別称のないものがあることや、前記報告書との混同を避ける意味もあって、前例に倣い同一番号とした。

第Ⅰ郭

館跡西端部に位置し、第Ⅱ郭と本郭西側にある丘状地形とは空堀によって分離されている。長軸41m、短軸36mを測る不整形を呈する郭であったが、二度にわたる土取りにより、原形を留めていない。又、別称も無い。郭破壊の過程は次の通りである。

昭和47年郭上面を1～2m削平して周辺の斜面部分を埋め、畠地の拡大と機械化農業経営の確立を目指したが、降雨のたびに土砂が周囲の低地に流れ込み、水田や宅地周辺にまで及ぶようになった。この為、昭和50年以降、台地の西側から土取り工事に着手、昭和54年8月までは郭の約半分が削り取られた。なお昭和53年度に実施された館跡分布調査（秋田県教育委員会）で、当市における館跡の重要性が強調されたことから、昭和54年7月30日付で土木工事等によ



第5圖 七寶全圖

る発掘届を提出、同年9月28日文化庁より県職員の立合いのもとに工事を実施するように指示があった。

西側丘状地形の上面には「ハ」字状に配置された土壙状施設があり、その南側には作業道で切られた物見台的な施設が張り出している。

第Ⅱ郭

通称「古館」と呼ばれている郭である。第Ⅰ郭の東側に位置し、第Ⅰ郭とⅢ郭とは比高差7~17m程の空堀により分離されている。郭上面は、形の歪んだ台形を呈し、規模は長軸107m、短軸62mを測り、東から西へ緩やかに傾斜している。郭北側と南側の斜面には幅15~20m、長さ35m程の腰郭をもち、これらは東側斜面にみられる幅4m程の帯郭によって連結されている。なお、北側腰郭は、昭和53年~54年の土取りによって堤状に破壊されている。

昭和30年の発掘調査では、郭上面を中央で二分するように南北に延びた幅1m、長さ71mのトレンチを設定している（第6図参照）。トレンチ内からは9棟の竪穴住居跡と共に、土師器破片・南宋青磁片・青銅製小鉢・火箸様鐵棒・鉄釘・古錢（祥符元宝・嘉祐通宝・無銘錢）・木器残片が出土している。報告者は「以上九個の住居址は、かつて第二館址の上に存在していた住居址のごく一部にすぎない。（中略）この館の上にはある期間にわたって、かなり多數の竪穴住居が営まれたことは確実であろう。」と述べている。

第Ⅲ郭

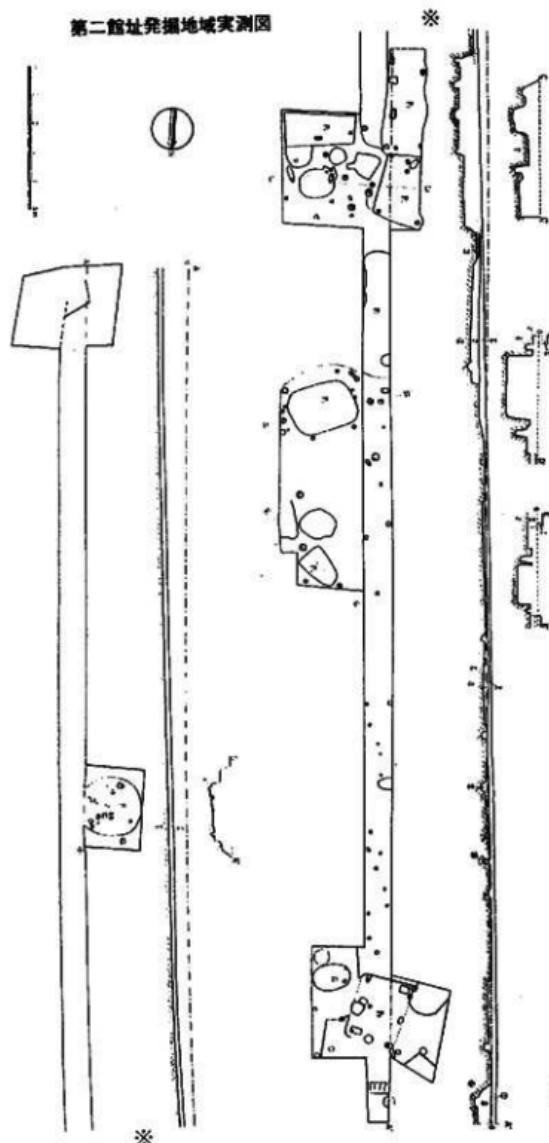
通称「小館」と呼ばれている郭である。第Ⅱ郭とは墓地をのせた小台地と空堀で、第Ⅳ郭とは比高差7mの空堀によって分離されている。

郭上面は、瓢箪形に近い形状を呈しており、長軸85m、短軸38mを測る。郭両端には24m×24m、39m×40mを測る平坦部をもち、中央部は両端より3m程低くなっている。郭北側に26m×20mの腰郭をもち、上面との比高差は10mを測る。

本郭と第Ⅱ郭の間には、長軸88m、短軸25mの細長い台地がある。この郭状台地は本郭と類似した構造をもっており、中央部は両端平坦面より約2m程低くなっている。

昭和30年の発掘調査では、郭南側の平坦面中央に幅1m、長さ37mのトレンチ、これに並行して北側15mの地点に幅1m、長さ13mのトレンチを設定している（第7図参照）。前者トレンチ内からは5棟の竪穴住居跡が検出され、南宋青磁片・明末陶器片・桃山陶器片・古錢（皇宋通宝・聖宋通宝・洪武通宝他）・小札・鉄釘・土製るつぼ・石臼等が出土している。このほかに同郭東側斜面に幅1mのトレンチを設定し、空堀の状況を観察している。

第二館址発掘地域実測図



※1958年、「館址」より転載
縮尺を統一するため報告書
収載図面を拡大・縮少した

第6図 昭和30年発掘地域実測図(1)

第Ⅳ郭

通称「館神」と呼ばれている郭である。小枝指館のほぼ中央に位置し、第Ⅲ郭とⅤ郭とは深い空堀と沢によって分離されている。

郭上面は、平坦で、東西に長い菱形を呈し、長軸141m、短軸79mを測り、8つの郭の中で規模が最も大きい。郭東側斜面下には細流が北流し、深い谷を作り出している。

昭和30年の発掘調査は、郭南西部に幅2m、長さ20mのトレンチを設定し、6棟の竪穴住居跡の検出と共に、南宋青磁片・桃山陶器片・鍬先形鉄器・槍・小刀・小札・鎧鉗・鉄製轍口・内耳鉄鍋・火箸様鉄棒・鉄釘・鉄製楔等が出土している。

第Ⅴ郭

館跡東端部に位置する郭で、通称「八幡館」もしくは「新城」と呼ばれている。第Ⅳ郭及び館後方に続く台地とは、空堀や深い沢によって分離されている。特に第Ⅳ郭との間には沢・土塁・空堀等が複雑に絡み合い強固な防禦体制を取っている。

郭上面は形の歪んだ台形を呈し、長軸124m、短軸95mを測り、ほぼ平坦でわずかに西側に下がっている。郭西側と東側には、長軸30~95m、短軸5~20mの腰郭が付設されている。

昭和56年5月、本郭北東下に所在する寺院改築の際に、斜面の一部が削り取られ、その断面には遺構とみられる落ち込みが観察された。

第Ⅵ郭

第Ⅴ郭の南側に位置する郭で、空堀、沢状地形により他郭と分離されている。郭上面は不整形を呈し、平坦で、長軸101m、短軸43mを測る。なお本郭又は第Ⅴ郭を指すのか定かではないが、小枝指氏の給所における郷宅(田屋)を表わす「田屋敷」という名称が伝えられている。

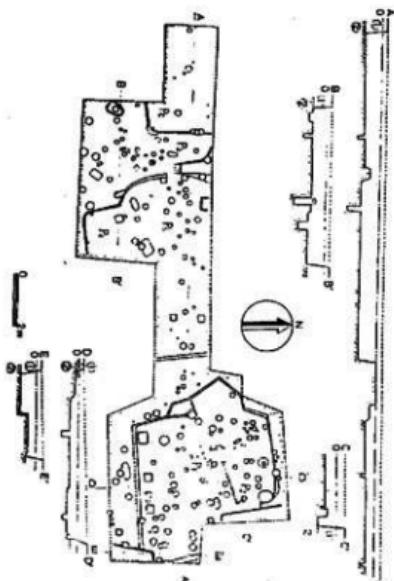
第Ⅶ郭

第Ⅱ郭とは沢を隔てて対峙する台地先端部に位置する。

郭上面は、平坦で、東西に長い二等辺三角形を呈し、長軸93m、短軸38mを測る。郭北側と南側には幅10~14m、長さ75~100mの細長い腰郭が1~2段付設されているほか、西側には空堀により分離された小丘状地形があり、本館第Ⅰ郭と同じような配置を呈している。

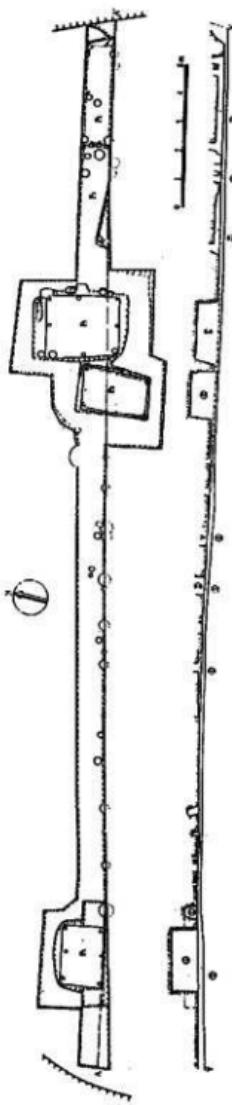
第Ⅷ郭

第Ⅵ郭東側に位置し、第Ⅶ郭とⅥ郭とは比高2m程を測る空堀によって、上り町台地とは深い沢によって分離されている。郭上面は長方形を呈し、長軸60m、短軸25mを測り、平坦であ



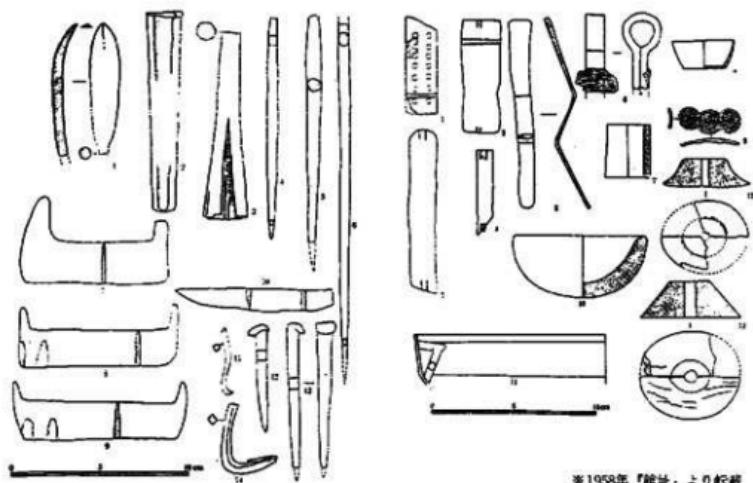
第四館址発掘地域実測図

※1958年『鉢社』より転載
※縮尺を統一するため報告書
収載図面を拡大・縮少した。



第三館址発掘地域実測図

第7図 昭和30年発掘地域実測図(2)



*1930年『絵図』より転載

第8図 昭和30年調査出土遺物

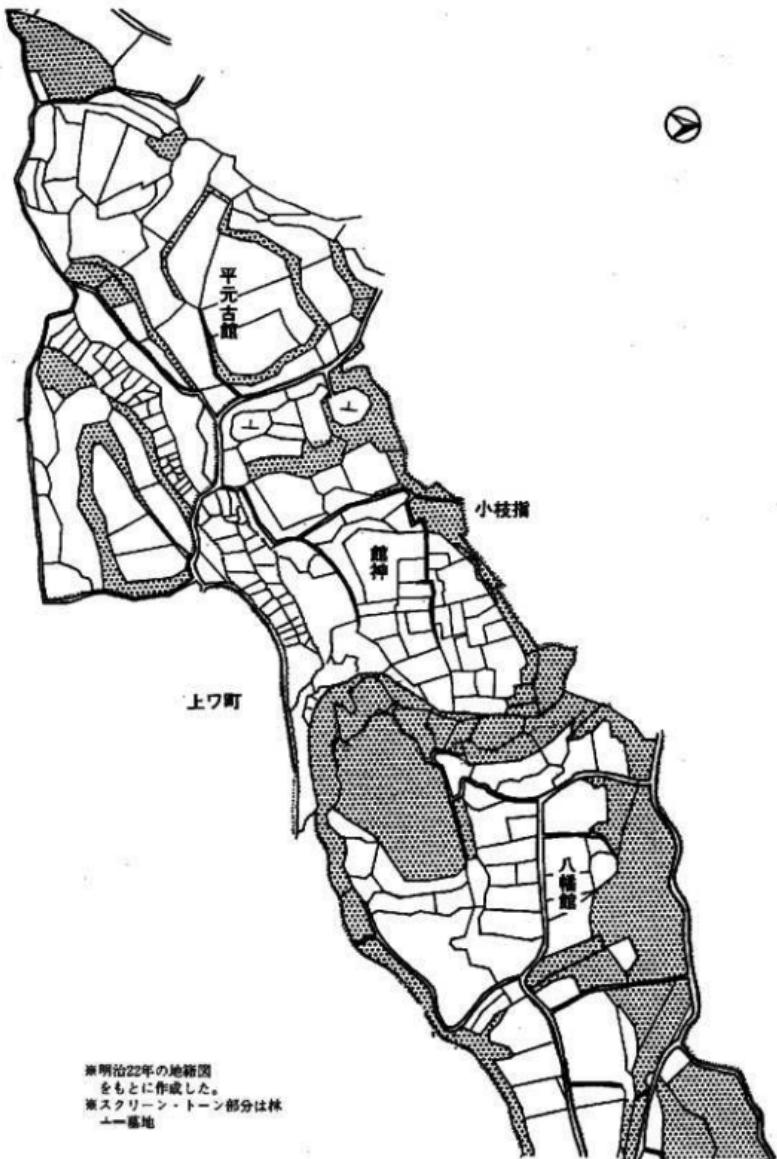
る。郭南側には1~2mの比高差をもって幅2~4m、長さ100m程の帯郭が付設されている。

※ 上ワ町

小枝指館との関連が考えられる地域である。

第Ⅶ郭の東側に続く台地で、小字名を「上ワ町」と呼ぶ。この台地は平元小学校ののある平元館へと続き、小さな舌状台地が枝のように延びている。第Ⅶ郭と沢を挟み向い合う北側斜面には幅3~5m、長さ100mの2段の平場が存在し、台地上面とは上段で2m、下段で4mの比高差を測る。第Ⅶ郭と向い合う西側斜面には、幅5~9m、長さ30~40mの平場が3段付設されている。

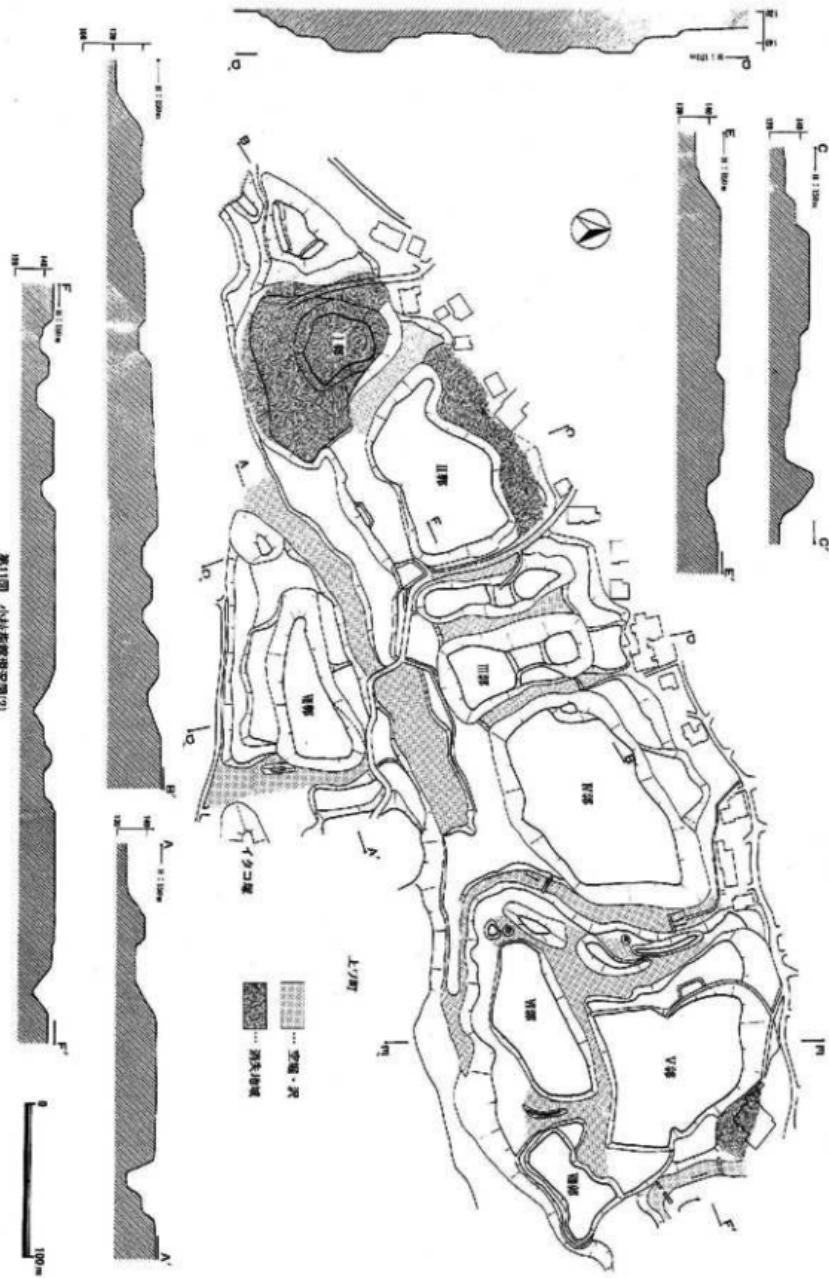
(藤井安正)



第9図 小枝指鰐周辺切絵図



圖111 心外膜細胞



第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

小枝指館の位置する台地は、畑地、果樹園等に利用され今に至っている。しかし近代農業の進展は農業機械の大型化や多様化を生み、現状の農道規模ではまかないきれないものとなった。このため鹿角市産業経済部農林課では、平成3年より平元地区の団体営農道整備事業計画を策定し、実施するはこびとなった。これに先立ち、平成2年に農林課・市教育委員会の間で、同計画により一部消失するおそれのある小枝指館の保護・保存について協議が行われた。教育委員会では同計画が鉄路の側辺部や空堀部分であったことから消失する地域については、発掘調査を実施し、記録保存することにした。調査期間については、事業計画を考慮し、平成3年4月から6月にかけて実施することにした。

(藤井安正)

2. 調査要項

- | | |
|-----------|--|
| 1. 遺跡名 | 小枝指館跡 |
| 2. 調査地 | 秋田県鹿角市花輪字八幡田7-5他 |
| 3. 調査対象面積 | 3,865m ² |
| 4. 発掘調査面積 | 1,829m ² |
| 5. 調査期間 | 発掘調査 平成3年4月15日～6月25日
報告書作成 平成3年6月26日～4年3月31日 |
| 6. 調査主体者 | 鹿角市教育委員会 |
| 7. 調査担当者 | 鹿角市教育委員会社会教育課
(主任 秋元信夫、主事 藤井安正) |
| 8. 事業主体者 | 鹿角市産業経済部農林課 |
| 9. 調査参加者 | 調査指導員 熊谷 太郎 (秋田県教育庁 文化課 学芸主事)
調査員 安村 二郎 (鹿角市史編さん委員)
鎌田 健一 (秋田県立十和田高等学校 教諭)
成田 典彦 (鹿角市立理科教育センター 専任)
三ヶ田俊明 (鹿角市立中滝小学校 教諭)
調査補助員 武藤孝一、花海義人、米田直穂、伊藤裕幸
木村昭子 |

作業員 安保久作、安保与一、小田切末吉、児玉吉次郎、児玉喜代治
児玉光衛、児玉直美、児玉秀春、寺沢末司、兎沢義進
小鴨セツ、小鴨ハツエ、金沢ミサ、黒沢リヤ、児玉サキ
児玉スエ、児玉リヤ、佐藤ナミ、佐藤良子、岡 アイ、
兎沢サツ子、兎沢スエ、兎沢セツ子、兎沢優子、豊田キエ、
豊田ナミ、奈良 妙、村方キユミ

10. 社会教育課

課長 川又 第三
課長補佐兼
大場現状判石
整備対策監査官
小笠原 昇
主任 秋元 信夫（調査、庶務担当）
主事 藤井 安正（調査担当）
臨時職員 古川 孝政（庶務）

11. 調査機関・協力者

秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、鹿角市産業経済部農林課
児玉峻悦（行政協力員）

3. 調査の方法

発掘調査対象地が、小枝指館跡を縦断するように分散していることから、館跡西端よりA～E区と呼称した。

各調査区内のグリッド・トレチ設定については、農道建設予定路線の中心杭・境界杭を利用した。グリッド設定は、任意の中心杭2点間を結ぶ直線とその延長線を基線として、これに直交する線を設定し4m×4mのグリッドを組んだ。グリッドの名称は、調査区長軸ラインにアラビア数字を、短軸ラインにアルファベットを付し、両者の組み合わせでA-1グリッドのように呼び、名称とした。トレチ設定については、中心杭及び同ラインを利用し、これに平行または直交するトレチを設けた。トレチの幅は1m～2mとし、長さについては地形に対応させ任意とした。グリッド、トレチの名称が他調査区と重複する場合には、名称の前に調査区の名を冠せた。

発掘作業はすべて手掘りによる分層発掘とし、できるだけ上面での遺構確認に努めた。

遺構の番号は、種別、発見順に付したが、調査の結果、遺構と認めがたいものについては欠番とした。

遺構の精査に際しては、竪穴住居跡では4分割法、土壙では2分割法を用いたが、溝状遺構については任意の分割法をとった。遺構の実測についてはグリッドを使用し、その大きさに即

して1m×1mの小グリッドを設定する簡易遺り方測量を用いた他、平板測量をも使用した。豊穴住居跡・土壌については1/20の縮尺、その他のものについてはそれに対応した縮尺を使用した。

遺構外の遺物は、各グリッド・出土層位ごとに一括して採取した。また、遺構内の復元可能な土器、土製品については、遺物番号を付し、出土地点・レベル測量を行ない取り上げた。

写真撮影は、実測図同様に記録保存の要であることから、35mm判小型カメラ2台を使用し、モノクロ、リバーサルフィルムに収めた。

(武藤孝一)

4. 調査の経過

小枝指館の発掘調査は、平成3年4月15日から開始した。4月1日から12日までは、作業員の手配、プレハブの設定および発掘機材、台帳類等の諸準備を行った。

4月15日、作業員への事務連絡、作業説明を行い、グリッド設定と並行してC区東部より表土除去作業を開始する。調査補助員、作業員を2グループに分け、C、D区の調査を行うが、D区では抜根作業に時間を費した。23日、C区において造成されたと考えられる整地面を確認したことから、この追跡と造成方法の調査のためトレンチ掘りを行う。4月末にはD区南端部においてもC区と同様の整地面を確認した。

5月2日、D区の調査は空堀および帶郭部分に移行する。5月中旬には、C区西部において溝状遺構（第301号）を、D区においては空堀（第401～402号）と土壙を確認し、隨時図面作成、写真撮影を行う。15日にはC区の調査は基本層序を残すのみとなったことから作業員をE区に移動し、a～jトレンチを設定し、遺構確認面までの表土除去作業を行う。a、bトレンチから溝状遺構（第501～502号）の検出が相次ぐ。5月下旬には空堀の土砂堆積状況を把握するため2本のトレンチを設定し、掘り下げを行う。

5月30日からはA区東部、6月4日からはA区西部の表土除去作業を開始するが、東部は木根が多く作業は難渋する。7日には西部より豊穴住居跡（第101号）、これより少し遅れて東部において豊穴住居跡（第102～104号）を確認した。6月中旬には西部より礫石をもった建物跡、溝状遺構等を確認し、隨時精査・図面作成・写真撮影を行う。19日にはB区の旧地形確認のためトレンチを設定し、掘り下げを開始するとともに、A区検出遺構の実測作業を急ぐ。

6月25日、小枝指館全景、各調査区の写真撮影のほか、トレンチ等の危険箇所の埋め戻し、防禦柵の設置を行い、すべての調査を終了した。

(武藤孝一)

第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物

1. A区の検出遺構と出土遺物

(1) 基本層序

調査区東部と西部では、堆積土の色調等が著しく異なることから、別個のものとした。

東部（第12図）

I層 黒褐色土 第I郭に近い地域では層厚0.2m、平坦部縁辺では0.4~0.5mを測り東部全域を覆っている。郭に近い地域では、郭斜面より崩れたシラスが本層上面に堆積していた。本層下位には小礫の混入が多い。

II層 黒色土 東部南半にみられ層厚0.1~0.2mを測り、層中に少量の地山粒を含んでいる。

III層 黒褐色土 平坦部斜面中頃から下位にみられる。層厚0.1m程を測る。地山土ブロックを多く含みボサボサしている。

IV層 黒褐色土 平坦部下位にみられる。間隙が大きい。

V層 黄褐色土 申ヶ野火山灰層と考えられる層である。地域によっては漸移層ともいえる暗褐色土が薄く堆積している。

西部（第22図）

I層 黒褐色土 土壌状施設付近では層厚1.4m、第101号竪穴住居跡付近では0.2mを測り、西部全域を覆う。砂粒の混入が多いためか全体的にサラサラしている。

II層 暗褐色土 I層と同様の堆積状況を呈し、層厚0.45~0.2mを測る。I層と同様砂粒の混入が多いためか全体的にサラサラしている。

III層 褐色土 調査区中央、第102号溝状遺構付近にみられ層厚1mを測る地域もある。丘状地形の斜面からの崩壊土と思われるシラスを多量に含んでいる。

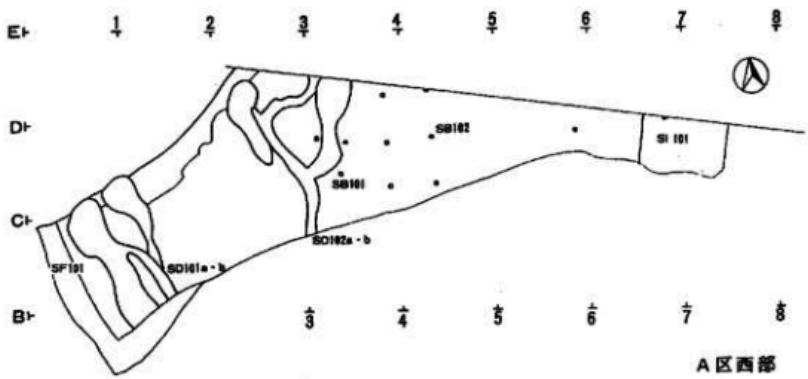
IV層 黒褐色土 調査区東半にみられ層厚0.1~0.2mを測る。堅く踏みかためられており、中世の遺構確認面である。

V層 によい黄褐色土 台地を作り出す基本層（シラス層）である。IV層の存在しない地域では中世及び古代の遺構確認面である。

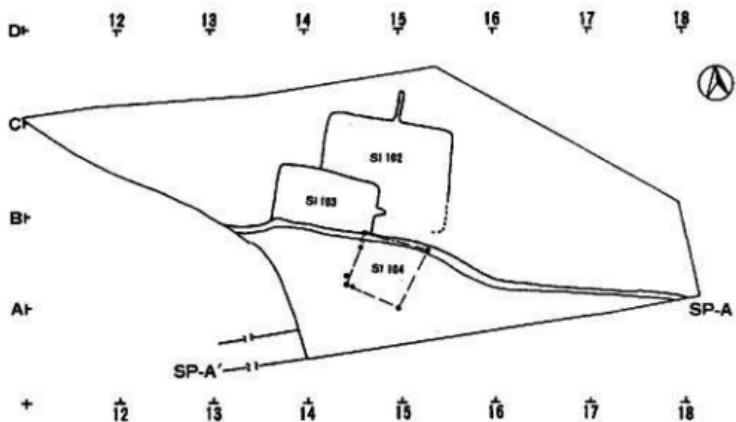
(2) 竪穴住居跡

第101号竪穴住居跡（第13図、第14図）

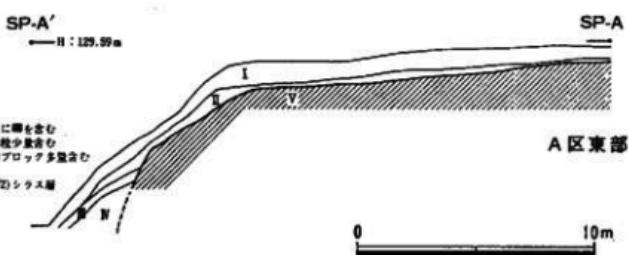
調査区西部、C-6、7、D-6グリッドのV層上面において黄褐色土を少量含む黒褐色土の落ち込みを確認した。本住居跡の南側は、腰郭崩壊のため消失している。また、北側、東側は調査対象区外に延びていることから充掘には至っていない。なお、本住居跡は建物跡ピット



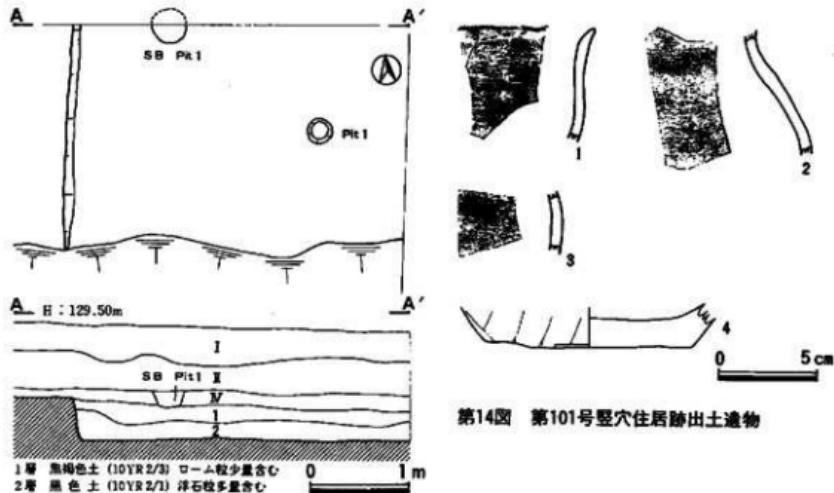
A区西部



A区東部



第12図 A区遺構配置図



第13図 第101号竪穴住居跡実測図

1と重複関係にあり、本住居跡が古い。

上記の事由から、平面形・規模・主軸方向については不明な点が多い。壁は西壁の一部を確認したにすぎないが深さ0.44mを測り、床面よりわずかに外反して立ち上がる。床面は緩やかで大きな起伏を示すが、堅く踏みしめられていた。床面直上には、炭化材と共にカヤと考えられる多量の炭化植物が確認された。焼失家屋である。

堆積土は、2層に分層された。自然による堆積状況を示し、下層に浮石粒が認められた。

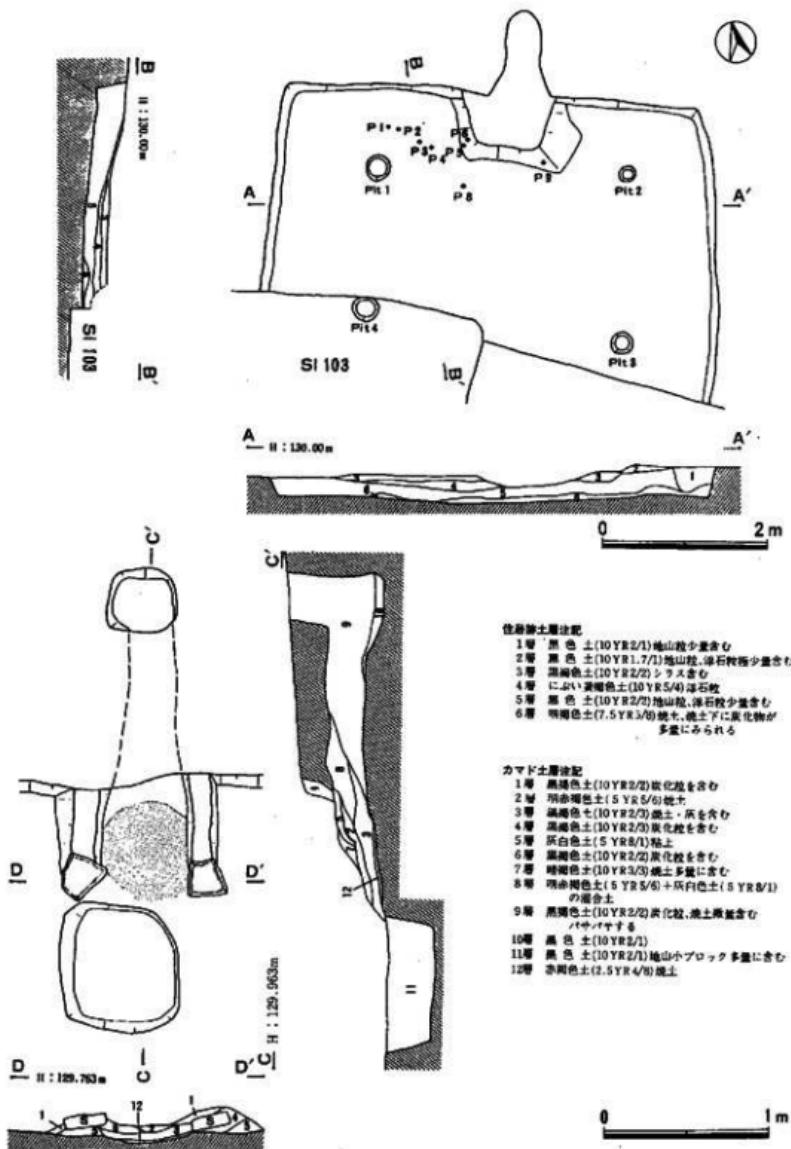
遺物は、堆積土下位及び床面直上より少量の土師器・須恵器破片（第14図1～4）が出土した。4は、土師器壺の胴部破片で、外面には範削り、内面には弱い範なが施されている。1～3は須恵器壺・壺の各破片で、1には輪積み痕がみられる。

本住居跡の構築時期は、大湯浮石降下以前の平安時代中頃と考えられる。

第102号竪穴住居跡（第15図、16図、17図、18図）

調査区東部のほぼ中央、C、D-14、15グリッドにおいて浮石の堆積とこれを取り囲む黒色土の落ち込みを確認した。本住居跡の南壁は第103号竪穴住居跡との重複により消失している。新旧関係は本住居跡が古い。

平面形は、方形を呈するものと考えられる。長軸5.50m、短軸4.00m（推定）、床面積はおよそ 19.8m^2 を測る。主軸方向はN-14°-Wである。



第15図 第102号竖穴住居跡・カマド実測図

壁は、いずれも床面よりやや外反して立ち上がり、壁高0.16~0.43mを測る。

床面は、細かな起伏をもっているが平坦な感を受け、カマド周辺部は特に堅く踏みしめられていた。床面直上全域には、多量の焼土及び炭化材・カヤと考えられる炭化植物が認められた。焼失家屋である。

柱穴は、Pit 1~4で、住居跡の対角線上に位置している。径0.18~0.3m、深さ0.6~0.69mを測る。

堆積土は、自然による堆積状況を呈し、6層に分層された。

カマドは、北壁のほぼ中央に設置されている。残存状態は極めて不良である。カマド袖部、天井部は0.2~0.25m程の扁平な角礫を芯材とし、これに粘土を張り付けて構築している。煙道はトンネル状を呈し、燃焼部から極めて緩やかに延び、その後急角度で煙出し部が立ち上がっている。前庭部には、径0.74×0.77m、深さ0.28mのピットをもち、わずかに灰が確認された。

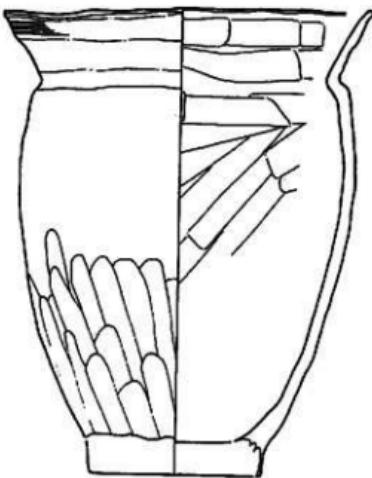
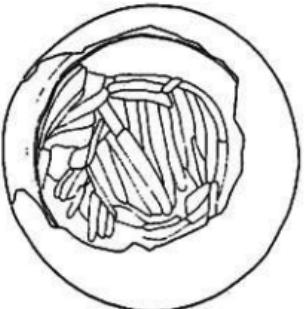
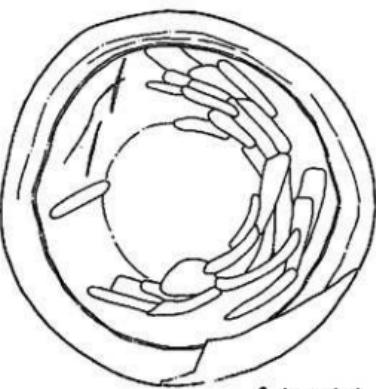
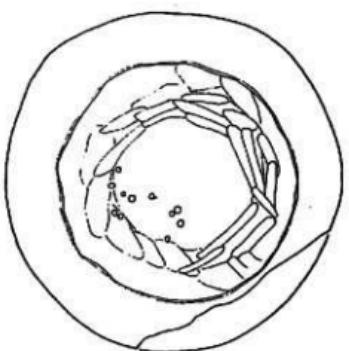
遺物は、カマド内およびその周辺の床面・床直より多く出土した。土師器の壺3点(1~3)、甕6点(4~9)、壺2点(10, 11)、紡錘車3点(12~14)の復元陶化土器、土製品の計14点と少量の土師器片のほか、砥石1点(15)である。

1は、平底気味で安定性のある壺形土師器で、体部中程に段を有している。口唇部は窪切りされ、角ばっている。段上部には横なでがなされているが、前調整の刷毛目状痕が所々にみられる。段下部には横位方向の篦みがきがなされており、前調整の篦削りの痕跡がかすかにみられる。内面は黒色処理がなされ、横位・斜位のていねいな篦みがきが施されている。底面には種子と思われる圧痕が観察された。口径14.3cm、高さ5.0cmを測る。胎土に砂粒を含み、色調は橙色~黒色を呈する。

2は、平底気味の壺形土師器で、体部中程に段を有している。底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。段上部には横なでがなされているが、前調整の刷毛目状痕が所々にみられる。段下部には横位方向の篦みがきがなされており、前調整の篦削りの痕跡がかすかにみられる。内面は黒色処理がなされ、横位・斜位のていねいな篦みがきが施されている。底面にはかすかに残る木葉痕、口縁部内面には種子と思われる圧痕がみられる。口径15.9cm、高さ4.7cmを測る。胎土に砂粒を含み、色調は明褐色~黒色を呈する。

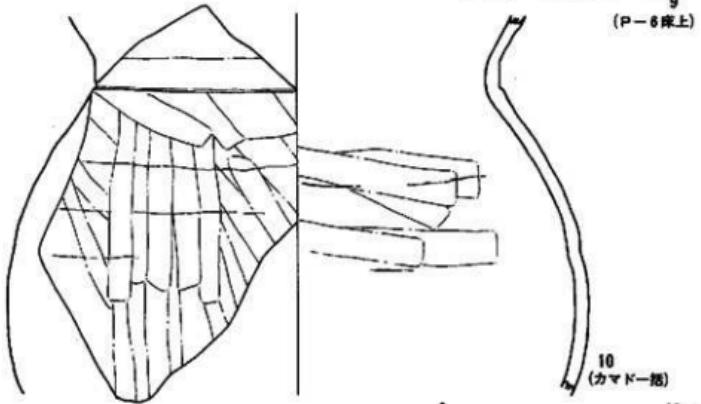
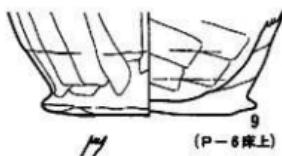
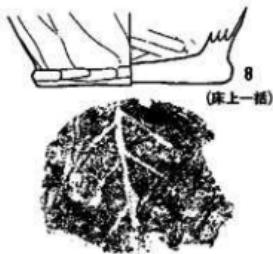
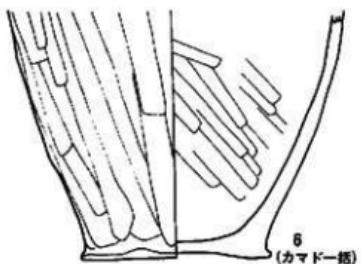
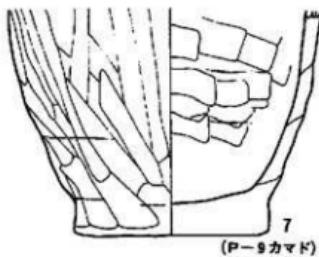
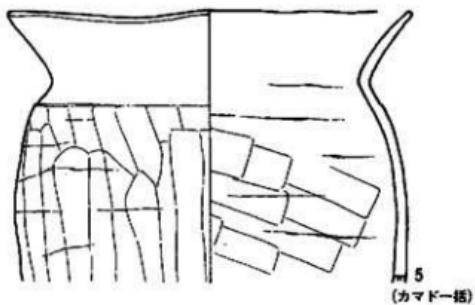
3は、口縁部~体部上半を大きく欠損する丸底の壺形土師器で、体部外面中程に段を有する。段上部には横なでがなされるが、刷毛目状痕が所々にみられる。段下部~底面にかけては篦削り後、ていねいな篦みがきがなされている。内面は横位・斜位のていねいな篦みがきがなされている。黒色処理は顕著ではない。推定口径12.7cm、高さ4.1cmを測る。胎土は精選されている。色調は明赤褐色~黒色を呈する。

4は、頸部に段を有し、口縁部が外反する變形土師器である。口縁部外・内面には横なでが



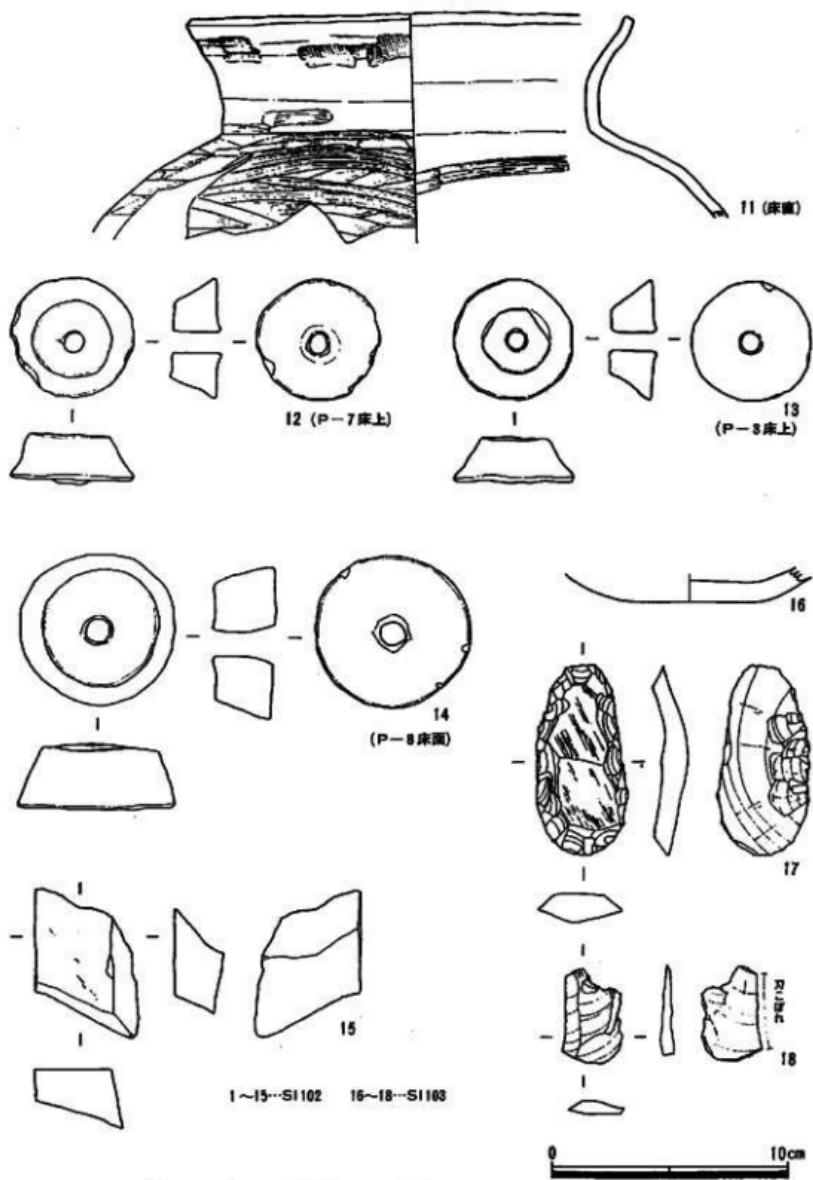
0 10cm

第16図 第102号竪穴住居跡出土遺物(1)



第17図 第102号竪穴住居跡出土遺物(2)

0 10cm



第18図 第102号竪穴住居跡出土遺物(3)・103号竪穴住居跡出土遺物

施されているが、所々に刷毛目状痕がかすかに残る。胴部外面下半は箒削り後、ていねいな箒なでが施されている。内面には弱い刷毛目状痕がみられる。口径15.8cm、高さ19.9cmを測る。胎土に砂粒を含み、色調は明赤褐色～黄褐色を呈する。器外面には二次火熱によるこまかな剝離が多数みられる。

5は、頸部に段を有し、口縁部が外反する変形土師器である。口縁部外、内面には横なでが施されている。胴部外面に箒なでが施され、内面は横位又は斜位のなでが施されているが、刷毛目状痕がかすかに残る所もある。内面には輪積み痕がみられる。口径17.0cmを測る。胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色～橙色を呈する。

6～9は、変形土師器の胴部下半もしくは底部である。胴部外面に箒削りまたは箒なでが施され、内面には刷毛目状痕がみられる。6は箒削りにより上底気味、7は箒なでにより平滑にしている。8の底面には木葉痕が観察された。いずれも胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色、にぶい黄褐色、橙色を呈する。

10は、壺形土師器の口縁部～胴部上半にかけての大破片である。口縁部は外反し、頸部に段を有し、胴部は丸みを帯びる。口縁部外、内面に横なでがなされている。胴部外面には箒なで、内面にはなでが施されるが、所々にかすかに刷毛目状痕がみられる。胴部内面に輪積み痕がみられる。胎土に砂粒を含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。

11は、壺形土師器の胴部上半である。10よりも胴部は丸味を帯び球形に近い器形を呈するものと考えられる。口縁部外面には横なでが施されているが、前調整の刷毛目状痕がかすかに残っている。胴部外面には刷毛目状痕がみられる。口径19.0cmを測る。胎土に砂粒を含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。

12～14は、土製の紡錘車である。断面形は台形を呈するが、12、13の側辺は「ノ」を呈している。上径2.8～5.0cm、下径5.0～6.7cm、高さ2.0～2.8cm、重さ43～130gを測る。いずれも極めてていねいな箒みがきが施されている。胎土に細砂を含み、色調は橙色～にぶい橙色を呈する。

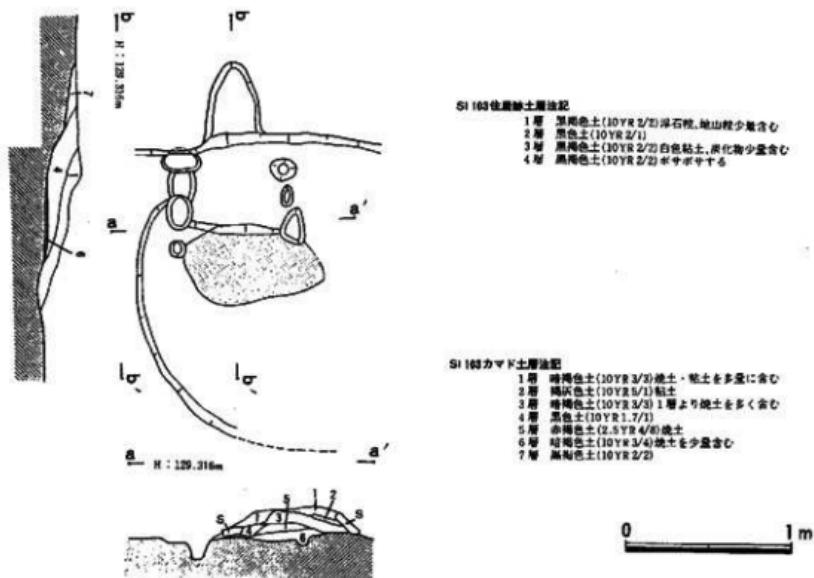
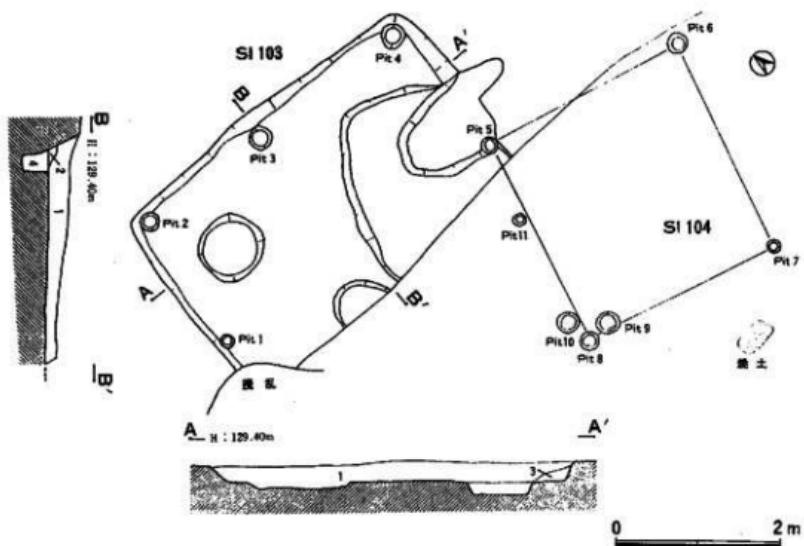
15は、破損した砥石で、石質は凝灰質泥岩である。

本住居跡の構築時期は、出土遺物より奈良時代中頃と考えられる。

第103号竪穴住居跡（第19図）

調査区東部のほぼ中央、B、C-13、14グリッドにおいて浮石粒を含む黒褐色土の落ち込みを確認した。第102号、104号竪穴住居跡と重複し、第102号竪穴住居跡より新しく、第104号竪穴住居跡より古い。なお、本住居跡南半部は、中世の造成作業において削平されている。

平面形は、方形を呈すると考えられる。長軸4.40m、短軸4.00m（推定）、床面積16.7m²



第19図 第103号・104号竪穴住居跡、カマド実測図

(推定) を測る。主軸方向は N-106°-E である。

壁はいずれも床面よりやや外反して立ち上がり、壁高0.16~0.46mを測る。

床面は、大きく緩やかな起伏をもつが、平坦な感じを受け、カマド周辺が特に堅く踏みしめられていた。カマド周辺には、炭化物・白色粘土がわずかに確認された。

柱穴は、Pit 1 ~ 4 で、各隅と各隅間を二分する位置に配置されており、径0.13~0.28m、深さ0.11~0.29mを測る。

堆積土は、自然による堆積状況を示し、4層に分層された。

カマドは、東壁中央やや北寄りに設置されている。カマド袖部・天井部は崩壊していたが、構築材と思われる角礫がその周囲に点在していた。袖部の芯材を設置する小ピットは、径0.13~0.25m、深さ0.05~0.1mを測り、3~4個が縦列して確認された。煙道は、燃焼部から緩やかに立ち上がり、長さ1.00mを測る。前庭部は床面より0.05m程低く作られており、不整形を呈する。

床面には、付属施設として住居跡北西部と中央部に径0.8m、深さ0.14~0.2mのピットが確認された。

出土遺物は極めて少ない。床面上より上師器壺（第18図16）1点と、堆積土中より土器甕の破片2点、石器2点（第18図17、18）が出土したのみである。16は丸底気味の壺で、内黒処理が施されている。器内面にはこまかなる籠みがきが施されている。色調はにおい橙色、胎土には細砂を含み、焼成は良好である。17は横長側片を利用した搔器で、全局に剥離調整が行われている。長さ8.1cm、重さ43gを測る。18の一側縁には刃こぼれ痕が観察される。石材は黒色、硬質頁岩である。

本住居跡の構築時期は、出土遺物より奈良時代中頃と考えられる。

第104号竪穴住居跡（第19図）

調査区東部、B-14、15グリッドにおいて確認された。本住居跡は、中世の造成作業により柱穴を残し消失している。本住居跡の柱穴（Pit 1）を第103号竪穴住居跡カマドが覆っていたことから、本住居跡が古い。

柱穴はPit 5 ~ 8 で、径0.14~0.25m、深さ0.16~0.53mを測る。柱穴間の距離はPit 5 ~ 8 間が2.7m、Pit 5 ~ 6 間が2.6mを測る。柱穴配置及び焼土の位置から推定される主軸方向は N-29°-W である。

カマドは、住居跡南壁のやや東寄りに設置されていたものと考えられる。径0.42×0.25mの燃焼部焼土が残っているのみである。

本住居跡の構築時期は、第103号竪穴住居跡と同時、または古い年代が与えられる。

(3) 建物跡

第101号建物跡（第20図）

調査区西部中央、D-3グリッドのV層上面において確認した。第102-a号溝状遺構と重複しており、本建物跡が古い。

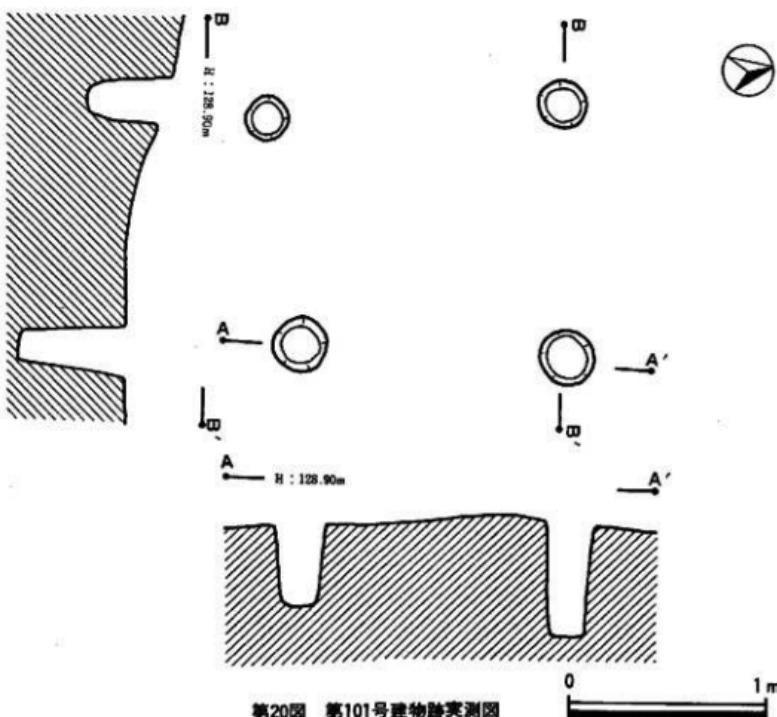
柱穴配置は、方形を呈し、東西1.30m、南北1.50mを測り、長軸方向はN-13°-Eである。柱穴規模は、径0.24~0.28m、深さ0.48~0.58mを測る。

遺物は出土しなかった。

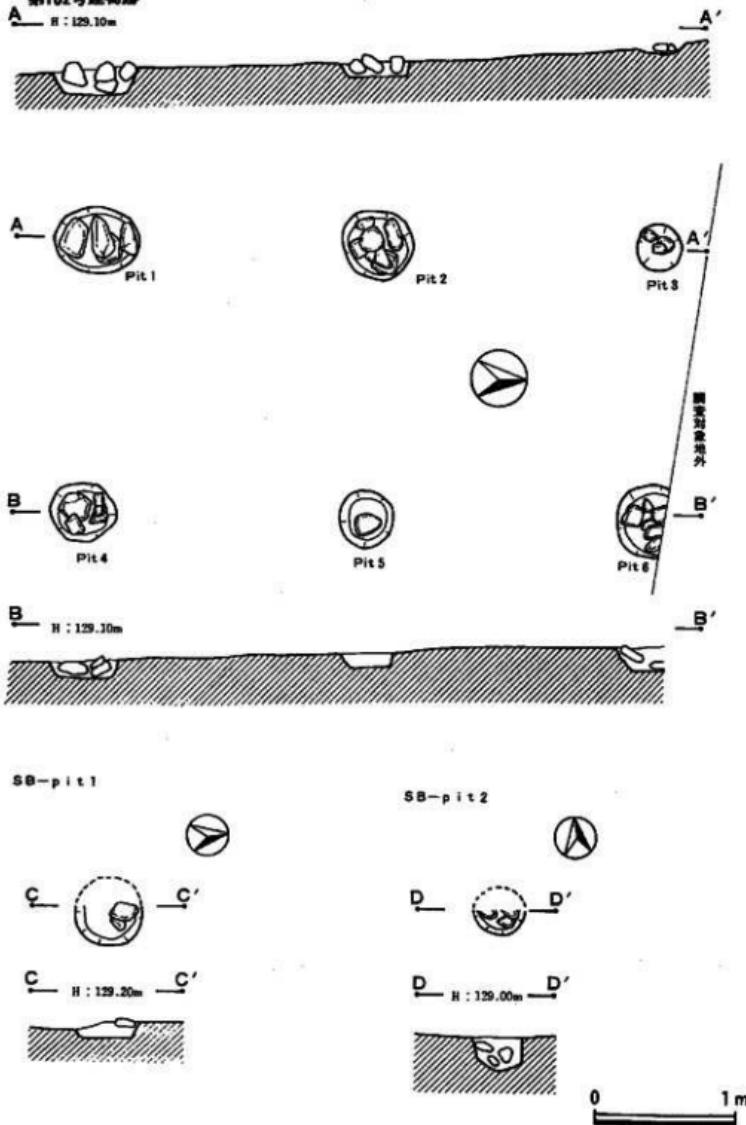
第102号建物跡（第21図）

礎石をもつ建物跡である。

調査区西部中央、D、E-3、4グリッドのV層上面において確認した。本建物跡西側2m地点に第101号建物跡が位置する。



第102号遺物跡



第21図 第102号遺物跡、Pit 1・2

南北棟桁行2間×梁行1間の建物跡で、桁行4.00m（南から2.00+2.00m）、梁行1.90mを測る。南北棟桁行はN-3°-Wである。

柱穴は、径0.4~0.5m、深さ0.1~0.18mほどの掘り方内に、拳大から人頭大の角礫1~7個を入れ礎石としている。

遺物は出土しなかった。

その他の柱穴（第21図）

第102号建物跡のほかに、柱配置を示さない2個（Pit1、2）の礎石が確認されている。

Pit1は、第101号整穴住居跡と重複しており、本ピットが新しい。柱穴は、径0.3m、深さ0.22mを測り、ピット内には拳大の角礫が確認された。

Pit2は、第101号整穴住居跡の西側2.8mの位置にあり、柱穴径0.46m、深さ0.15mを測る。ピット内には人頭大の角礫が確認された。

いずれのピットも遺物は出土しなかった。

（4）溝状遺構

第101a、b号溝状遺構（第22図）

調査区西端部、A-3、4グリッドのV層上面において確認した。第I郭先端に位置する小丘状地形およびその南端にある物見台的な施設（以下物見台と表記する）により、本遺構は北側と西側方面からは目隠し状態となっている。

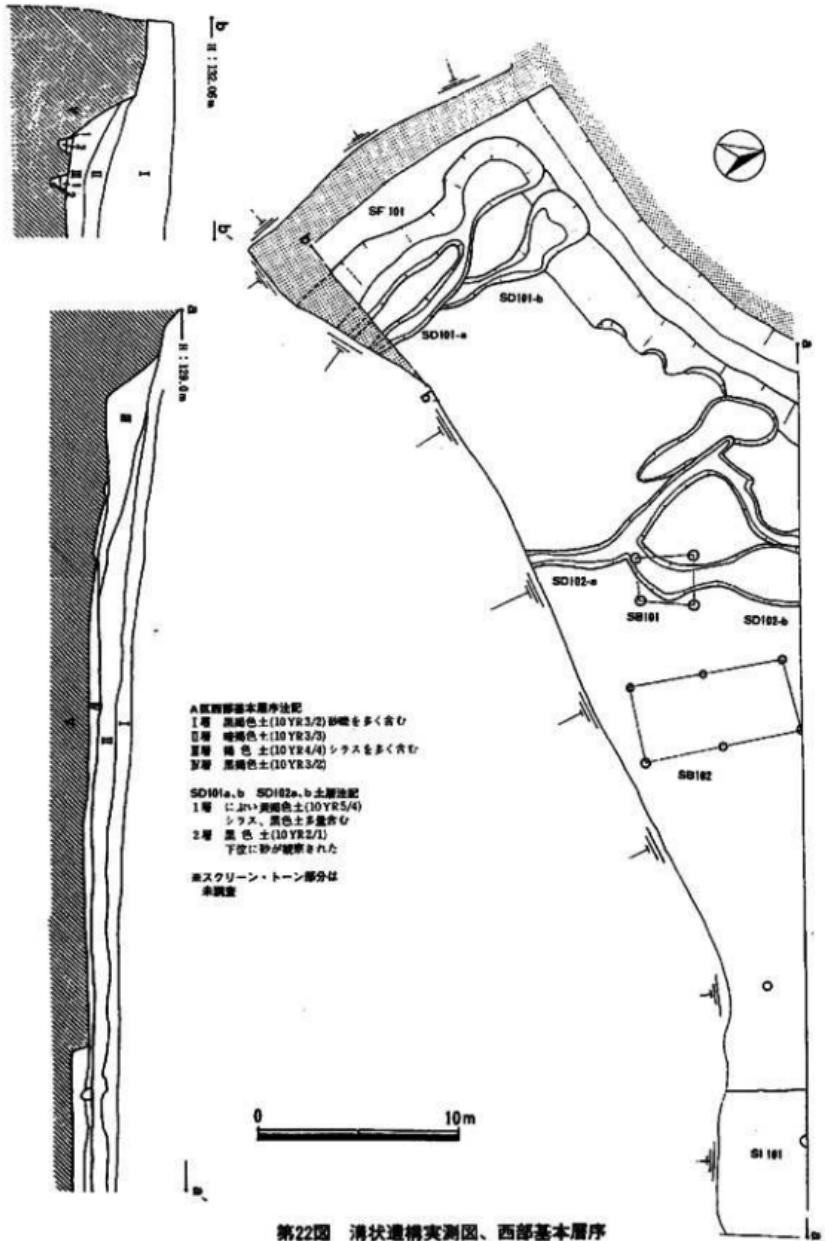
溝状遺構は、物見台の南側斜面をピット状に掘り窪め、これから流れ出す細い溝が付設されている。「Y」字状を呈するa号溝にb号溝が合流し、「N」字状を呈している。ピット状施設は径1.5~2.0m、確認面からの深さ0.5~0.77mを測る。本遺構西側に隣接する土壘状施設とは約2.0mの比高差をもっている。付設された溝は、現在長2.0~3.5m、幅0.3~0.5m、深さ0.2~0.52mを測る。溝の断面形は「U」字状を呈する。底面は大きな起伏をもち、南側へ緩やかに傾斜している。堆積土下位には砂粒が観察された。

遺物は出土しなかった。

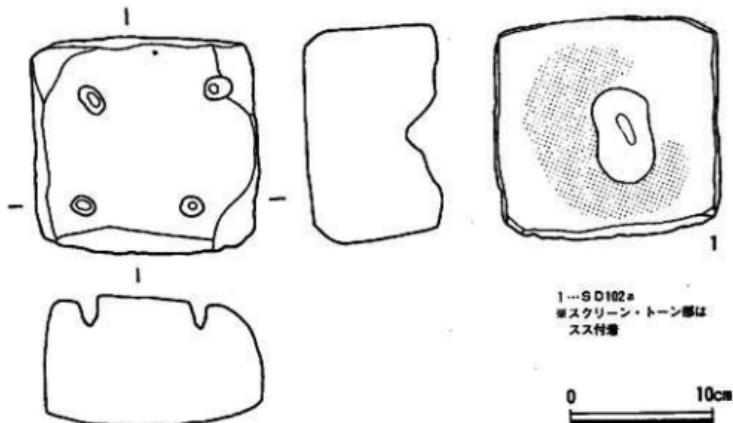
第102a、b号溝状遺構（第22図、23図）

調査区西部のほぼ中央、B-4、C-3、4グリッドのV層上面において確認した。第101号建物跡と重複しており、本遺構が新しい。

本遺構も第101号溝状遺構と同様の作りをしている。物見台の南側斜面にピット状の施設を作り、これに付設する溝をもっている。a号溝は径1.4m、確認面からの深さ0.23mのピット



第22図 溝状造構実測図、西部基本層序



第23図 溝状遺構出土遺物

状施設より流れ出した溝で、これに b 号溝が斜行して合流する。現存長 3.0 ~ 6.0 m、幅 0.38 ~ 1.5 m、深さ 0.02 ~ 0.31 m を測る。溝の断面形は「U」字状を呈する。底面は大きな起伏をもち南側へ傾斜している。底面には砂粒の堆積がみられた。

a 号溝より石製品（第23図）が 1 点出土した。一边が 16cm、厚さ 10cm の大きさに成形した立方体を呈する石材を用い、一面には対角線上に凹を穿ち、他面中央には径 4 cm、深さ 2.5 cm の凹を穿っている。煤状炭化物が付着していた。重さ 860 g を測る。石質は軽石である。

(5) 整地跡・土壌状施設

整地跡は、盛土又は削平というかたちで腰郭に残っていた。聞き取り調査によると「この腰郭は、第 I 郭西側にある空堀から落ちてくる沢によって二分されていたが、昭和初期の水田拡大に伴い西半分が大きく削平された」とのことである。

東側は、盛土・削平工事によりつくられた 2 段の整地面をもち、上・下段の比高差は 0.2 ~ 0.5 m を測る。上段はシラスを含む黄褐色土の盛土により、下段は地山を削平することにより造成されている。第 703 号、704 号竪穴住居跡は造成作業により消失に近い状態もしくは半壊している。整地面と水田との比高は約 8 m を測る。

西側は、腰郭を二分する沢へ向い傾斜している。このため西半においてはシラス層の削平と東半では盛土を行ない平坦な面を作り出している。

土壌状施設（SF101）は、腰郭の西端に位置する。シラス層削平の際に物見台から連続するように掘り残し構築されている。この施設は溝状遺構又は腰郭を目隠しする位置にあり、整地

面との比高は1.5～2.0mを測る。

(6) 造構外出土遺物（第24図、25図）

造構外より、縄文土器、須恵器1点、珠洲・越前系陶器1点、陶磁器4点、石器5点が出土した。調査区東部からの出土が多い。なお、縄文土器については細片のため割愛した。

a. 須恵器（1）

大型の壺の口縁部破片である。器外面には格子目叩き文がみられる。

b. 珠洲系陶器（2）

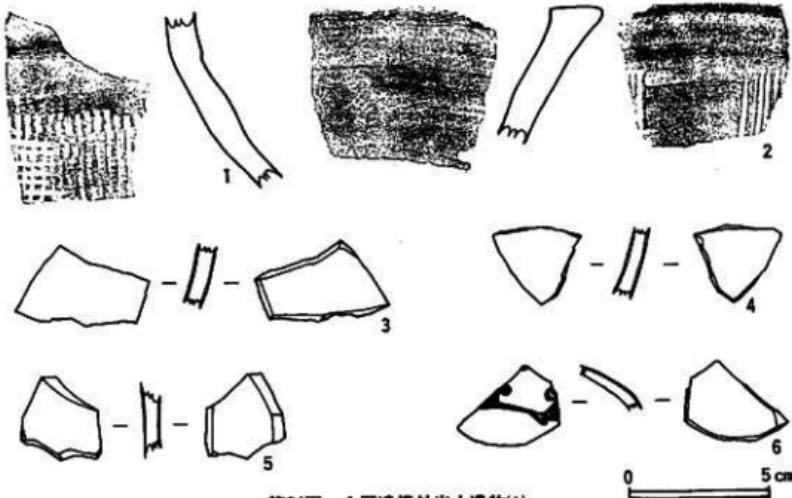
壺鉢の口縁部破片で、口唇部は肥厚している。無釉で、色調は灰青色を呈する。

c. 陶磁器（3～6）

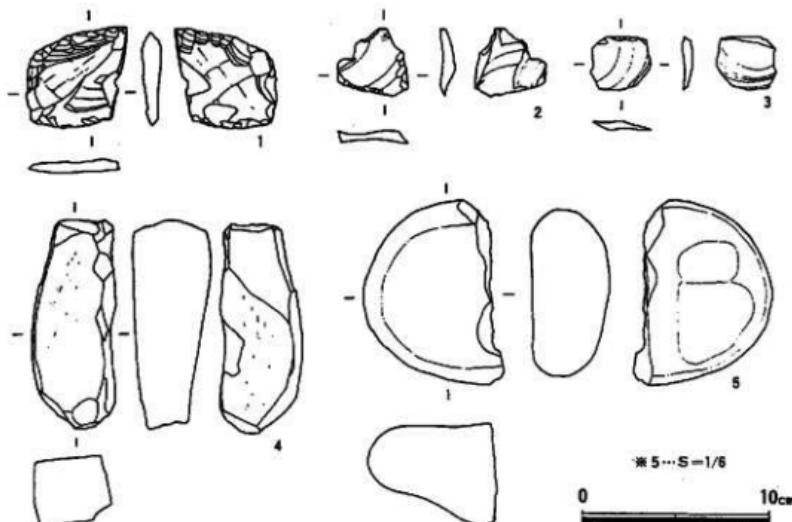
青磁（3、4）、染付（5、6）が出土した。青磁はいずれも碗の破片で、釉の色調は明緑色を呈する。15～16世紀、中国所産のものである。染付には徳利（5）、油壺（6）がみられる。油壺外面には梅木文が描かれている。17世紀後半～18世紀、国内産のものである。

d. 石器（第25図）

搔器3点、石皿1点、砥石1点が出土している。搔器は1～3側縁に刃部が作り出されている。重さ4.9～32.8gを測る。石質は黒色頁岩である。石皿は使用面から縁辺部にかけて変化に乏しいもので、表裏面に1～2の使用面がみられる。重さは2,460gを測る。石質はスコリ



第24図 A区造構外出土遺物(1)



第25図 A区遺構外出土遺物(2)

ア質安山岩である。砥石は3面の使用面をもつもので、最大長10.8cm、重さ210gを測る。石質は泥質凝灰岩である。

(藤井安正)

2. B区の検出遺構と出土遺物

B区調査区を設定した第Ⅰ郭は昭和47年の郭上面の削平工事、50年以降の土取り工事によりその原形を留めていない。本調査では幅1.5mのトレーニングを設定し、旧地形の復原を目的に調査を進めた。トレーニング内からは遺構・遺物とも確認、出土しなかった。なお調査区周辺については踏査を行ったが遺構・遺物とも確認、採取できなかった。

(1) 基本層序 (第26図)

I層 暗褐色土 郭上面に層厚0.2m程で調査区全域を覆っている。斜面では雨水により割れ落ちている部分もみられる。シラス粒の混入が極めて多い。

II層以下 によい黄褐色土・によい黄橙色土（いずれもシラス）が交互に堆積していた。昭和47年以降の埋めたてによるものと考えられる。本来のシラス層とは間隙等により容易に判断することができる。

(武藤孝一)

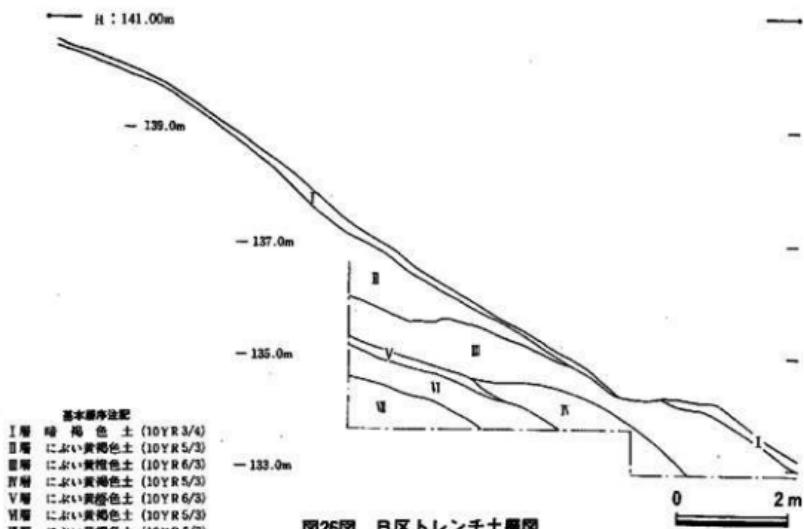


図26図 日区トレーンチ土層図

3. C区の検出遺構と出土遺物

(1) 基本層序 (第27図)

基本となる層序の分層については色彩、混入物、間隙等を考慮しⅠ～V層に分層した。

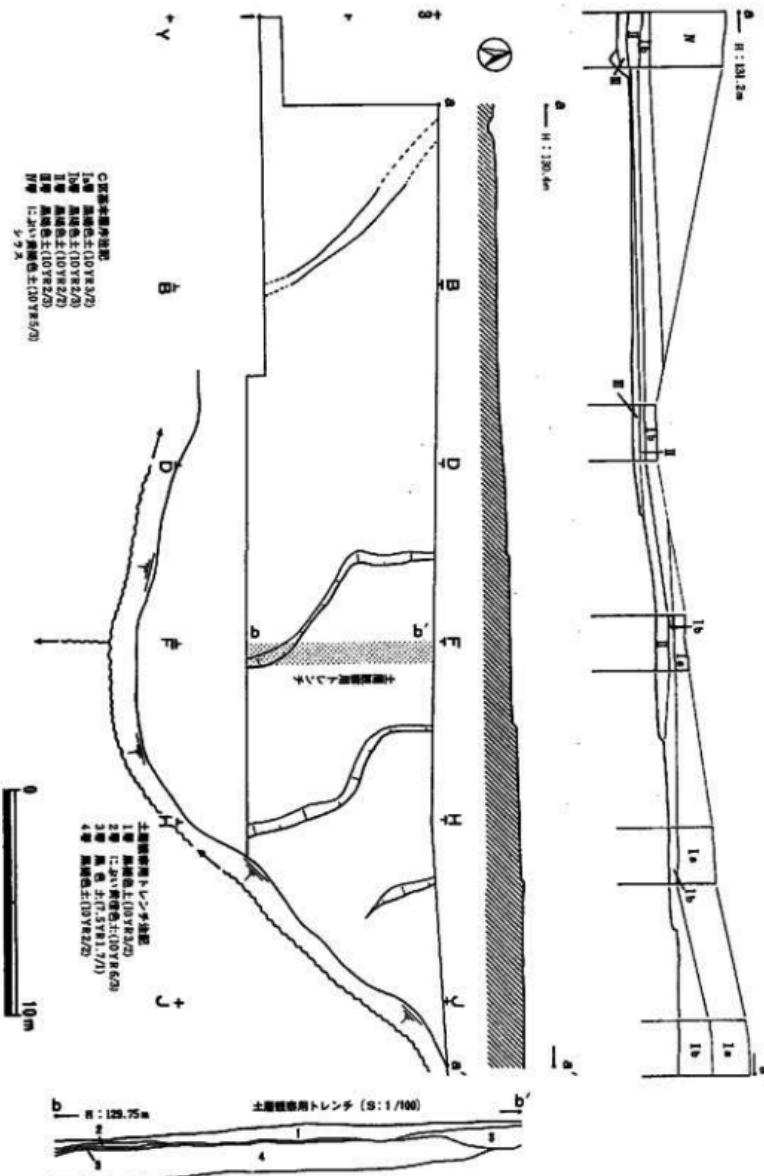
Ⅰ層 黒褐色土 耕作が及んでいるか否かで細分された。Ia層は層厚0.25～0.8mを測り調査区東半を覆っている。Ib層は層厚0.1～0.75mを測り、調査区全域を覆っていて東側の堆積が厚い。

Ⅱ層 黒褐色土 層厚0.1～0.25mを測り調査区西半を覆っている。Ⅰ層と同色を呈するが色彩が若干暗くなること、間隙が小さくなることから分層される。

Ⅲ層 黒褐色土 層厚0.2m程度を測り調査区西半を覆うがその範囲はⅡ層より小さい。Ⅱ層と比べ色彩はわずかに赤みをおび間隙がさらに小さくなる。

Ⅳ層 によい黄褐色土 第Ⅰ郭斜面より雨水により流れ込んできたシラスである。本来ならば基本層と呼べないものであるが、調査区西半を覆っているので層序の中に含めた。

Ⅴ層 によい黄褐色土 館の造成期と考えられる整地面であり堅く踏みしめられていた。層厚は0.1～0.25mを測る。Fラインに設定した土層観察用トレーンチでは本層下に黒色土・黒褐色土の堆積がみられる。



第27図 基本層序・整地跡実測図

(2) 溝状遺構

第301号溝状遺構（第28図）

調査区西端、A-2、3グリッドのV層上面において帶状を呈する暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構は整地面と沢地を区画するライン上に位置している。

本遺構は、極めて緩やかな弧状を呈し、確認し得た長さは6.00m、幅0.4~0.58mを測る。断面形は「階段状」を呈し、上段、下段までの深さは0.26m、0.64mを測る。本遺構の底面は北側から南側へ向けわずかに傾斜している。

遺構内より、18世紀以降所産の施袖陶器の皿の破片が出土している。器内外面には明褐灰色の袖が施されている。

(3) 整地跡

調査区東側から西側に向けて4段の平坦な面が確認された。東端部は、標高129mを測り、西側に行くにしたがい比高差0.2m程度で標高を下げ、西端とは0.5m程の比高を有している。

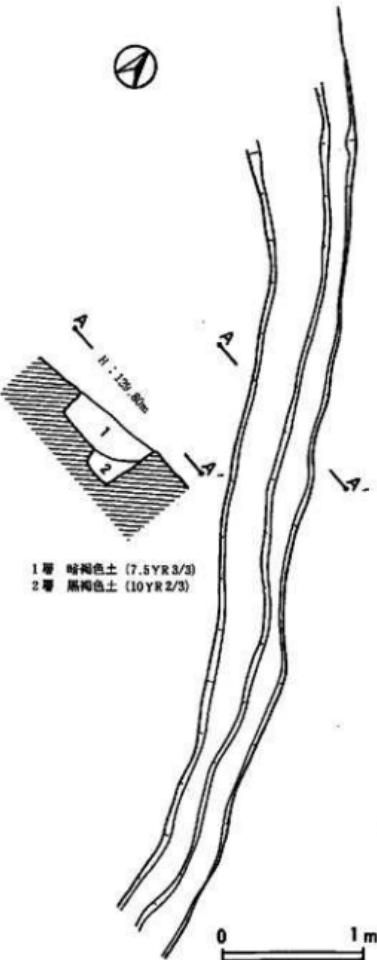
Fラインに設定したトレンチに表わされた土層を観察すると、湧水の激しい黒褐色土、黑色土上にシラスを0.1~0.2m程貼り、堅く踏みしめて整地面を作り出していた。土層観察用トレンチより花粉分析資料を採集した。分析結果は第V章に収録した。

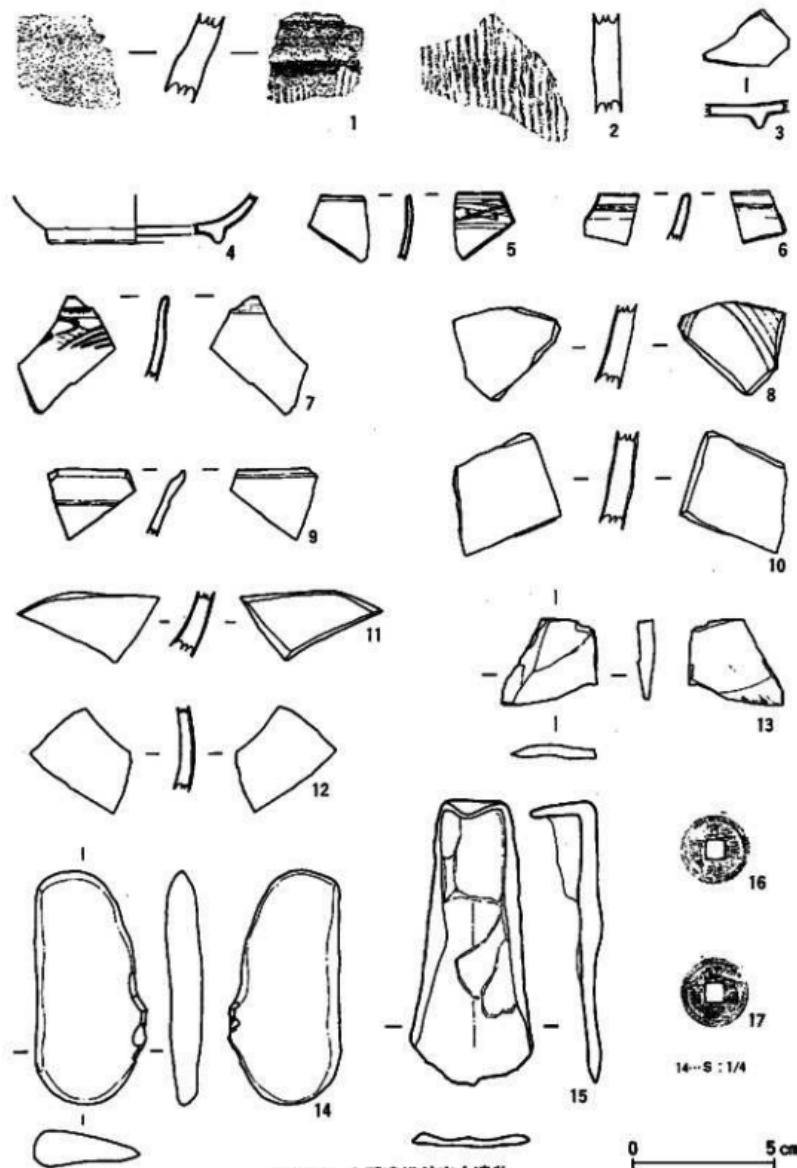
(4) 遺構外出土遺物（第29図）

C区遺構外からは、須恵器1点、珠洲・越前系陶器1点、陶磁器10点、石器2点、鉄製品1点、古銭2点が出土した。

a. 須恵器（2）

甕の破片で、外面に平行叩き目文がみられる。 第28図 第301号溝状遺構・出土遺物実測図





第29図 C区遺構外出土遺物

b. 珠洲・越前系陶器（1）

擂鉢の破片である。内面におろし目（6本1単位）のほか、わずかな段を有している。

c. 陶磁器（3～12）

白磁（3、4）、染付（5～7）、施釉陶器（8～12）が出土している。白磁はいずれも皿の破片で、4は底径6.4cmを測る。16世紀、中国所産のものである。染付はいずれも碗で、5、6は白色、7はにぶい橙色の生地上に線文又は直線や曲線の連続文が描かれている。5、6は18世紀、肥前地方所産、7は18～19世紀のものである。施釉陶器には徳利・碗・鉢・皿がある。8の内面には刷毛目文様が描かれている。9、10は灰釉、12は黒褐釉が施釉されている。いずれも18世紀以降のものである。

d. 石器（13～14）

13は一次剝離片の側縁部に刃こぼれ状の小さい剝離がみられる。最大長3.0cm、石質は硬質頁岩である。14は扁平な川原石の一側縁を打ち欠いた敲石で、長さ16.4cm、重さ500gを測る。石材は変質石英安山岩である。

e. 鉄製品（15）

楔状を呈するもので基部はL字状に折れ曲がっている。長さ9.9cm、幅4.3cmを測る。

f. 古銭

いずれも江戸時代鋳造の寛永通宝である。外径2.4cmで、背文はみられない。（藤井安正）

4. D区の検出遺構と出土遺物

(1) 基本層序（第30図）

Fライン、aトレンチに表われた土層を観察した。基本層はI、II層に分層された。

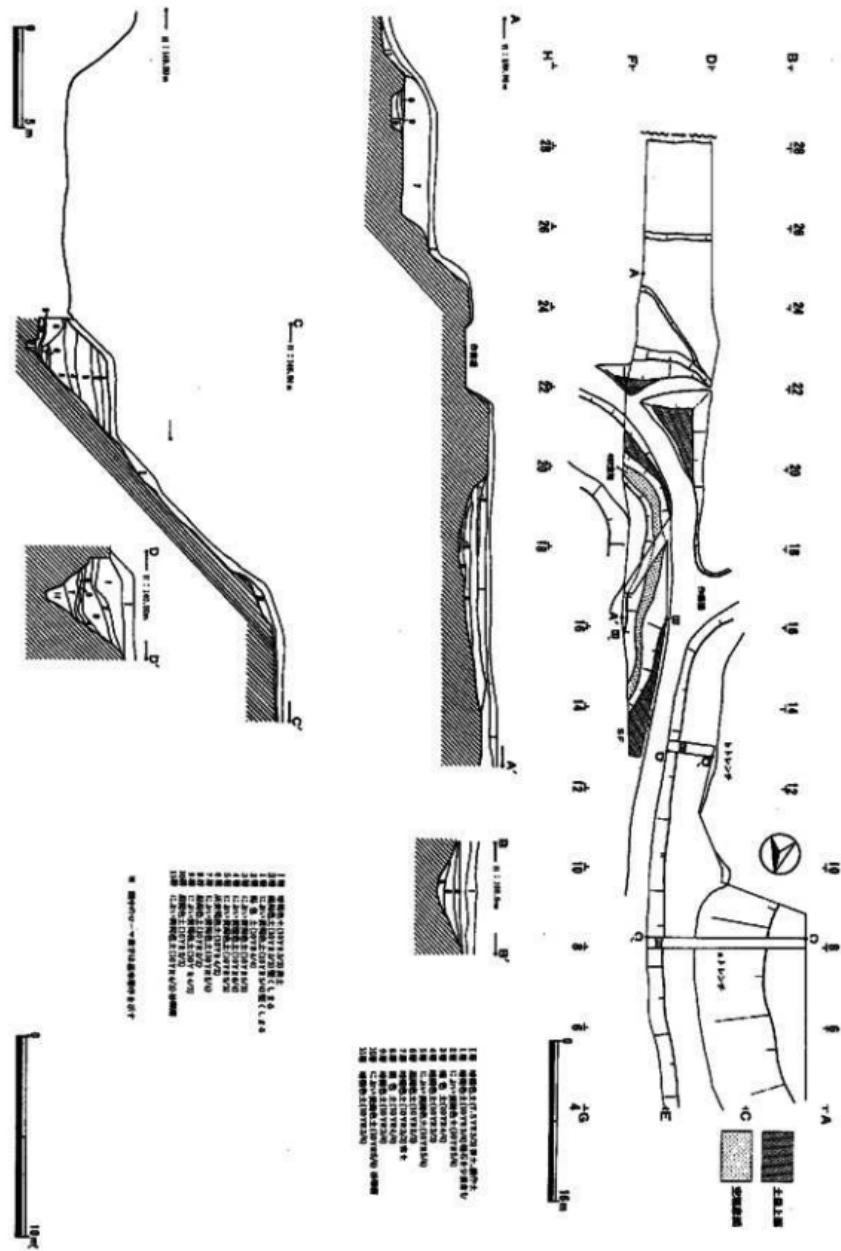
- I層 暗褐色土 層厚0.1～0.3mを測り調査区全域を覆っている。郭斜面の崩壊によるシラス粒の混入が多い。杉の植栽により植物根が多く空堀では擾乱の度合も高い。
II層 黒褐色土 II郭上面から側縁部にかけて観察され層厚0.1～0.2mを測る。シルト質でシラス粒の混入がみられる。

(2) 空堀・土塁（第30図）

- a、bトレンチ及び墓地をのせる小郭西側斜面下において空堀2条、土塁1条を確認した。これらは、その配置から二重空堀を呈するものと考えられる。

第401号空堀

- a、bトレンチにおいてその一部を確認した。トレンチ調査のため不明な点が多いが、II郭



と並行して台地を二分するものと考えられる。深さは犬走り上面より4.35~4.50m、土壘上面より2.20mを測る。横断面は「V」字状を呈し、底面には水流による幅0.5m、深さ0.4m程の溝が確認された。

第402号空堀

D-14~20グリッドにおいて確認した。空堀北半は調査区外のため全容は不明であるが、墓地をのせる小郭に沿って構築されたものと考えられる。空堀は小郭南側を取りまくように弧状に配置され、確認された長さ12.1m、土壘上面からの深さ1.40~2.05mを測る。横断面は浅い「U」字状を呈する。底面は大きな起伏をもち、北側に緩やかに傾斜している。

土 壊

上記の空堀を並列、二分するようにシラス層を掘り残し構築されている。両空堀との比高は1.4~2.20mを測る。

(3) 整地跡

調査区南側のD-26グリッドを中心とする地域において2段の整地跡を確認した。整地部は旧水田（沢地）より一段高い地域で、西側へ向けわずかながら標高を下げ、調査地C区へと達する。

調査区西側に沿って設定したサブトレーニチに表われた土層を観察すると、湧水の激しい黒褐色土、黒色土上に黄褐色土混りのシラスを0.2~0.3m程盛土し、堅く踏みしめて整地面を作り出していた。構築方法はC区と同工法をとっている。

(4) 遺構外出土遺物（第31図）

遺構外より、須恵器1点、土師器1点、陶磁器4点、石器2点、鉄・銅製品各1点、古錢2点が出土した。

a. 須恵器（1）

甕の胴部破片で、外面に格子目叩き文がみられる。

b. 土師器（2）

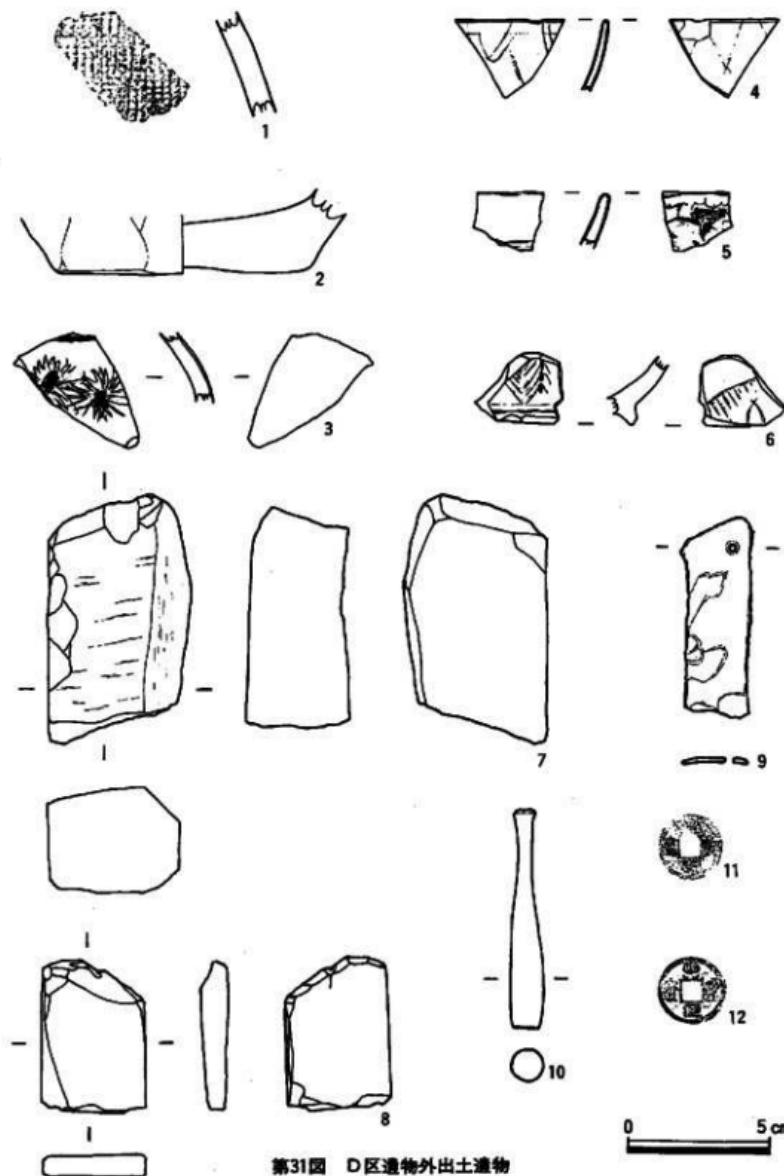
甕底部破片で、底径8.8cmを測る。外面には範削りがなされ、内面には刷毛目状痕がみられる。

c. 陶磁器（3~6）

染付の碗・徳利の破片である。文様は網目文、植物文（松）、幾何学文が描かれている。4は17世紀後半~18世紀、肥前地方所産、他は18~19世紀、产地不明のものである。

d. 石器（7、8）

2点とも砥石で、2~3面を砥面として使用している。石質は頁岩・変質石英安山岩である。



第31図 D区遺物外出土遺物

e. 鉄・銅製品 (9、10)

8は板状を呈するもので、端部に径2mm程の穴が穿たれている。9は第II郭上面から出土した煙管で、長さ7.8cm、最大径1.1cmを測る。

f. 古錢 (11、12)

11は元符通宝(宋 1098年初鑄)、12は熙寧元宝(宋 1068年初鑄)である。外径2.3~2.4cmを測る。

(藤井安正)

5. E区の検出遺構と出土遺物

(1) 基本層序 (第32~36図)

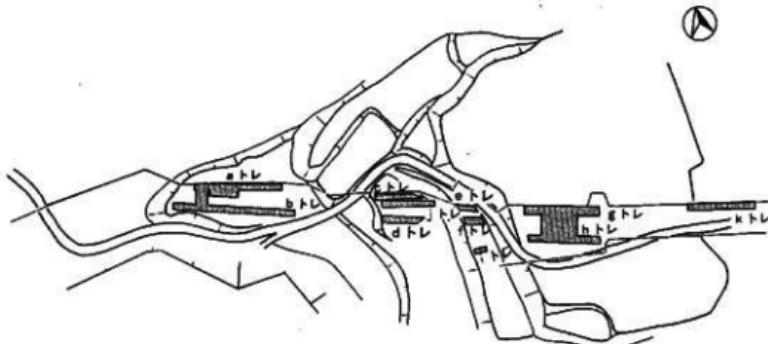
分層については色彩、混入物、間隙等を考慮しⅠ~Ⅳ層に分層した。台地西側に作り出された数段の平坦部にトレンチを設定し、それに表われた土層を観察したがⅠ層は各トレンチにおいて同色であった。(土層注記内のローマ数字は基本層序を示す)

Ⅰ層 黒褐色土 各トレンチにおいて観察され層厚0.1~0.25mを測る。各トレンチによつて地山粒等の混入率が若干異っていた。g、hトレンチは地山層まで浅く、木根により擾乱をうけ地山粒の混入が多い耕作土である。

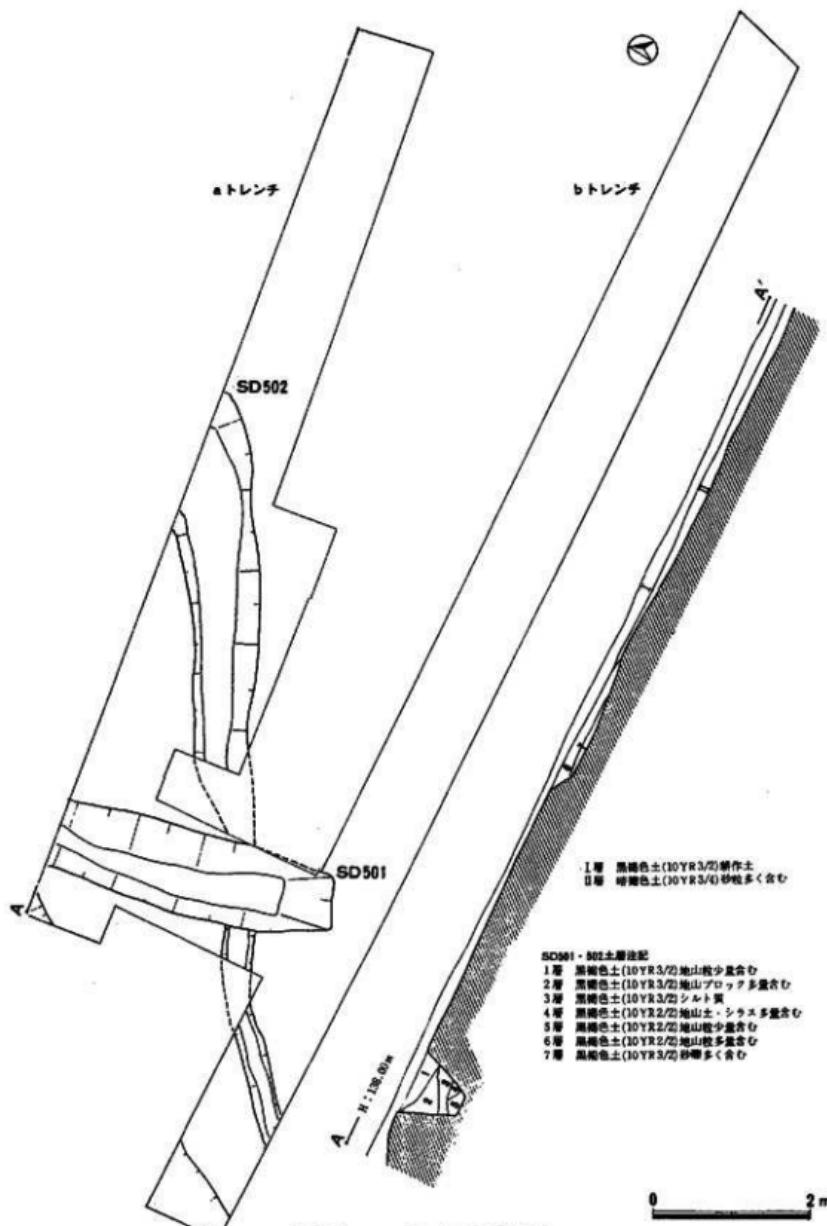
Ⅱ層 黒褐色土・暗褐色土 各トレンチにおいて観察され層厚0.2~0.6mを測る。e、f、iトレンチでは厚く堆積している。

Ⅲ層 黒褐色土 g、hトレンチ西半において観察された。層厚0.1~0.15mを測る。

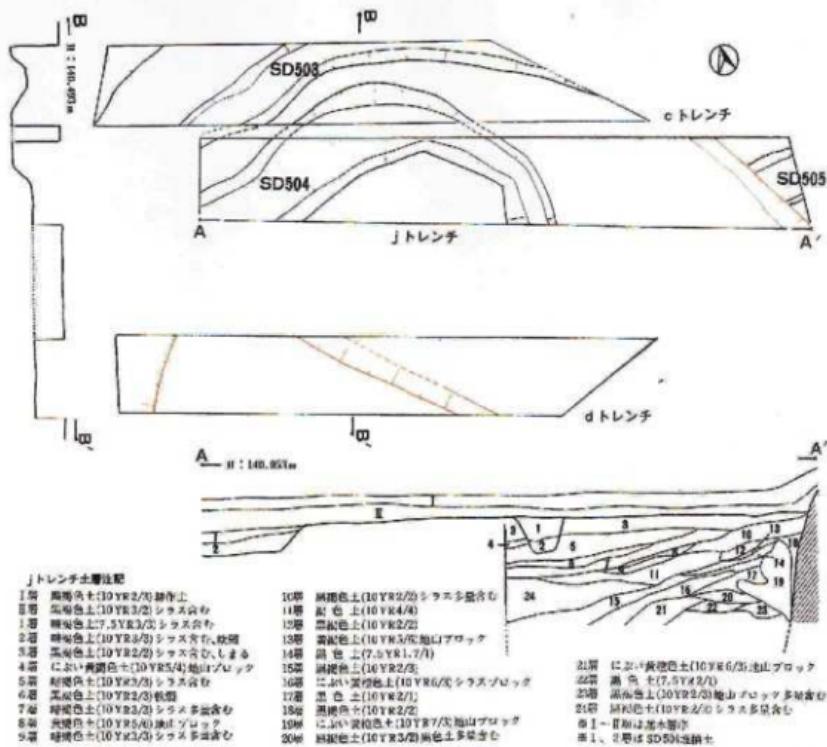
Ⅳ層 黄褐色土 台地上面に設定したg、h、kトレンチにおいて確認された。申ヶ野火山灰層と考えられる。本層下にV層(シラス層)が存在する。



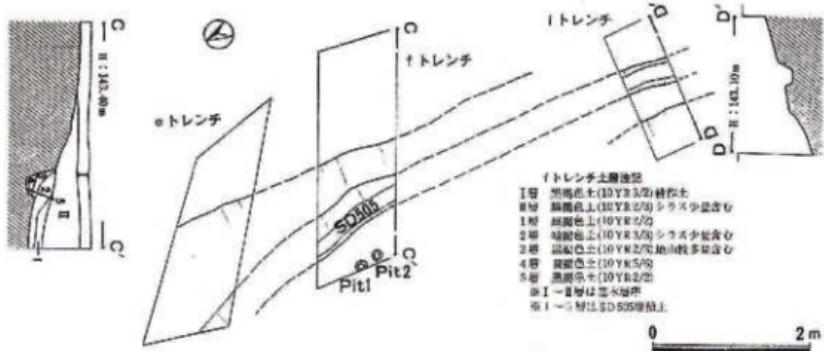
第32図 E区トレンチ設定図



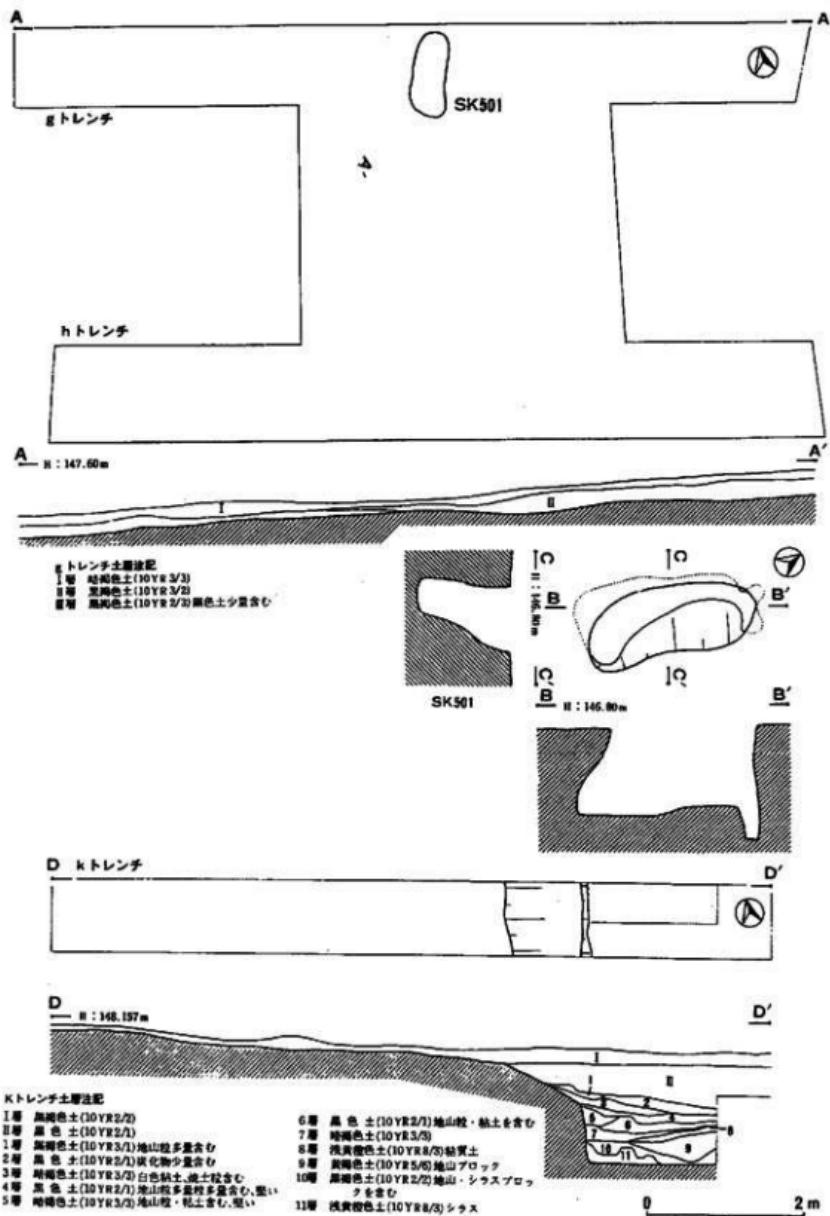
第33図 a・b トレンチ実測図



第34図 c・d・j トレンチ実測図



第35図 e・f・i トレンチ実測図



第36図 g・h・k トレンチ、第501号土壤実測図

(2) 土 壤

第501号土壌 (第35図)

g トレンチのほぼ中央、IV層上面において黒色土の落ち込みを確認した。平面形は梢円形を呈し、長軸1.8m、短軸0.67m、深さ0.9mを測る。長軸方向はN-25°-Eである。西壁は内側に若干入り込み、東側は底面より外反して立ち上る。底面は不整形で、しかも大きな起伏をもち、軟弱であった。

遺構内より遺物は出土しなかった。

(3) 溝状遺構

第501号溝状遺構 (第33図)

a、b トレンチ西端部、V層上面において第502号溝状遺構と重複する黒褐色土の帯状を呈する落ち込みを確認した。本遺構が新しい。

遺構北側は調査区外に延びるため全容は明らかでないが、長さ5.8m以上、幅1.75m、深さ1.09mを測る。底面はゆるやかな起伏をもち、堅くしまっており、所々の大きな窪みには砂粒の堆積がみられた。壁は底面より外反して立ち上がる。堆積土は5ブロックに区分でき人為堆積を呈する。

遺構内より遺物は出土しなかった。

第502号溝状遺構 (第33図)

a トレンチ中央からb トレンチ西端部のV層上面において、第501号溝状遺構と重複して確認された。本遺構が古い。

遺構北側は調査区外、同南側は農道により未発掘であるが、現存長14.7m、幅0.5~1.5m、深さ0.1~0.3mを測る。底面は北側にゆるやかに傾斜し、大きな起伏をもっている。所々の窪みには砂粒の堆積がみられた。壁は底面より外反して立ち上がる。堆積土は2ブロックに区分され人為堆積を呈する。

遺構内より遺物は出土しなかった。

第503号溝状遺構 (第34図)

c、d トレンチの空堀堆積土上面において、弧状を描く暗褐色土の落ち込みを確認した。本遺構南側に隣接して第504号溝状遺構が並列している。

トレンチによる調査のため全容については不明であるが、現存長9.0m、幅1.1m、深さ0.35~0.5mを測る。底面はゆるやかで大きな起伏をもち、所々に砂粒の堆積がみられた。壁は底

面より外反して立ち上る。堆積土は2層に分層され、自然堆積と考えられる。

遺構内より遺物は出土しなかった。

第504号溝状遺構（第34図）

c、jトレンチの空堀堆積土上面において、第503号溝状遺構と同心円状を描く暗褐色土の帯状を呈する落ち込みを確認した。

トレンチによる調査のため全容については不明であるが、現存長8.3m、幅0.8~1.6m、深さ0.5~0.7mを測る。底面はゆるやかに西側へ向け傾斜し大きな起伏をもち、所々に砂粒の堆積がみられた。壁は底面より外反して立ち上る。堆積土は2層に分層され、自然堆積である。

遺構内より遺物は出土しなかった。

第505号溝状遺構（第34図、35図）

e、f、i、jトレンチのIV層上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。

トレンチによる調査のため全容について不明であるが、fトレンチを設定した平坦部の縁辺に平行し、jトレンチのある平坦部もしくは第504号溝状遺構と重複する空堀に至るものと考えられる。長さは確認しているだけで約12.0m、幅0.55~1.1m、深さ0.25~0.45mを測る。底面は北側へ向け緩やかに傾斜し、所々に砂粒の堆積がみられた。壁は底面より外反して立ち上る。堆積土は2層に分層され、自然堆積である。

遺構内より遺物は出土しなかった。

(4) 空 堀

dトレンチのV層上面及び第504号溝状遺構精査時に黒褐色土を呈する大きな落ち込みを確認した。本遺構（第34図朱書き）は第503号溝状遺構とも重複するが、いずれの溝状遺構より本遺構が古い。

トレンチによる調査のため、その全容は不明である。空堀上幅7.65m、深さ2.5m以上を測る。第Ⅴ郭寄りにみられる空堀と土壙を挟み「二重空堀」になるものと考えられる。堆積土は21ブロックに区分され、人為堆積と判断された。

空堀を縦位に二分する土壙は、dトレンチのIV層の確認状況からこの地点が北端部となるものと考えられる。この土壙がdトレンチののる平坦部側縁に沿って延びるものとすれば長さは推定35mを測る。

(5) 造構外出土遺物 (第37図)

造構外より、珠洲・越前系陶器 1 点、陶磁器 2 点、古銭 2 点のほか土師器細片 16 点が出土した。土師器については摩滅が著しいことから割愛した。

a. 珠州・越前系陶器 (1)

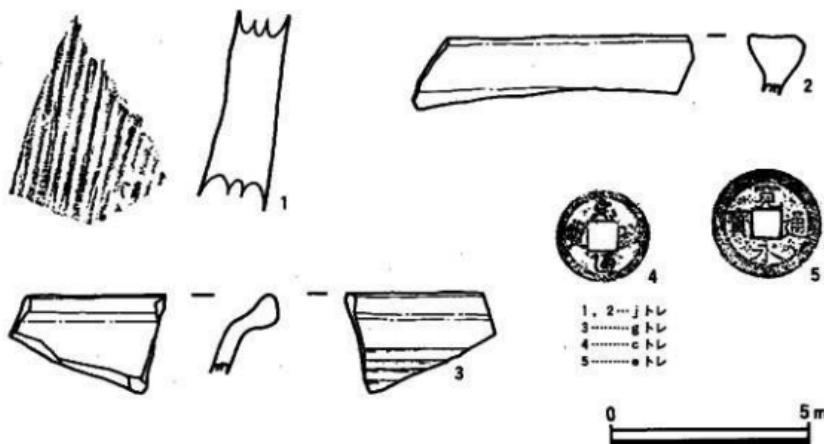
大型の壺胴部破片で、外面には平行叩き目文、内面にはかすかに当て板痕がみられる。

b. 陶磁器 (2、3)

施釉陶器である。2は黒褐釉が施釉されている。3は内面に横位方向の刷毛目文様が描かれている。いずれも18世紀以降のものである。

c. 古銭 (4、5)

4は元符通宝(宋 1098年初鋤)。5は寛永通宝(日本 1636年初鋤)で、いわゆる波錢と呼ばれるものである。
(藤井安正)



第37図 E区造構外出土遺物

第V章 自然科学的調査

1. 小枝指館の古環境

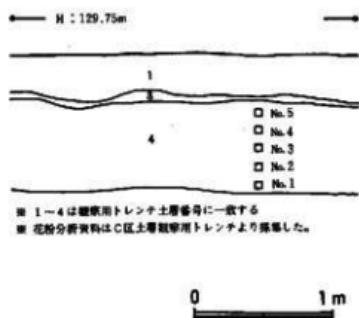
(1) 試料及び処理方法

ここであつかった土壤試料は、砂質腐植土である。試料は下位より5点採取した。試料の処理は、土壤250gをビーカーに取り、HF処理→水洗い→アルカリ処理(KOH)→水洗い→比重分離(ZnCl₂)→水洗い→アセトトリル処理→水洗い→封入の順に行い、プレパラートを作成した。花粉化石は当時の環境を推定するのに有効なデータになり得るが、酸化に弱く、黒土(腐植土)中には残っている割合が少ない。プレパラートの検鏡にあたっては通常400倍で行い、樹木花粉が250個以上計数するまで花粉・胞子を同定したが、出現数が少なくダイアグラムを作成することができなかった。

(2) 分析結果

出現したのは樹木花粉はマツ属、スギ属、ブナ属、コナラ属、ハンノキ属、ニレ・ケヤキ属、ヤナギ属の7属、草本花粉はイネ科、タンポポ亜科、キク科の3科である。また、シダ植物の胞子が見られた(第2表)。分析結果の特徴はこの地域の特徴であるスギ・ブナ林の様相を示し、現在見られる植生とほとんど変わらない。しかしながら、草本花粉の出現数(種類、量共に)が少なく、「湿地」「乾燥地」等の細かな考察は難しい。

(成田典彦)



第38図 採取層序と採取番号

	マ	ス	ブ	コ	ハ	ニ	ヤ	イ	キ	タ	胞
	ツ	ギ	ナ	ラ	ノ	ケ	ヤ	ネ	ク	ボ	ン
	属	属	属	属	属	属	属	科	科	科	子
No.5	2	3	1	2	2	1	·	2	1	1	8
No.4	3	1	·	1	3	5	2	1	2	1	5
No.3	1	2	3	2	1	2	1	1	2	1	6
No.2	3	1	2	4	1	3	2	1	2	3	6
No.1	1	6	1	1	2	1	·	2	3	5	2

第2表 検出された花粉化石の固体数

第VI章　まとめ

小枝指館は、鹿角市花輪字館神・字平元古館他に所在する。館は、米代川右岸に発達した舌状台地を空堀によって区切った8つの郭から構成されている。北側は館下に小枝指集落を控え、南側には水田を挟み小平館、新斗米館が位置している。

小枝指館は、昭和30年東京大学東洋文化研究所の「東北地方における集落址の研究」の一環として発掘調査された。その結果、館は戦国・織豊期まで使用されていたこと、しかも竪穴住居を内包した集落堡塁の遺跡であろうと結論づけている。

この度の調査は、平元地区の団体営農道整備事業に伴い小枝指館の一部が消失するため、発掘調査を実施し、記録保存することになった。調査面積は1,829m²である。

本調査によって、古代の竪穴住居跡4棟、中世の建物跡2棟、溝状造構8条、空堀3条、土壙2条、整地跡や時期不明の土壙1基を確認したほか、造構内外より縄文土器、土師器、須恵器、珠洲・越前系陶器、陶磁器の各破片や銅・鉄製品、石器、石製品が出土した。

第102号竪穴住居跡から出土した坏形土師器は、丸底又は丸底気味を呈し、体部中程に段を有し、黒色処理を施すなど、奈良時代中頃の特徴を持つものである。奈良時代の遺跡は、鳥野遺跡、菩提野竪穴住居群跡など4遺跡がある。これらは小平、草木、万谷野地域といった市内北半に確認例が集中しており、これに枯草坂古墳の位置を加味すると奈良時代の集落分布は市内北半に片寄っていたものと考えられる。

C区、D区において確認された整地跡は、館構築又は改築の際に堆土となったシラス等を沢地や斜面に埋め立てて作られたものと考えられる。同様に北側の館下、現在集落の位置する地域をみると水田までの間に数段の平坦面が確認される。同様の造成工事が行われたものと考えられるが、詳細については今後の課題としたい。

第2郭の東側に隣接する台地（小字名 上ワ町）は、地名から當時侍屋敷があったと推定されている地域である。トレンチで確認された台地を区切る様な落ち込み、又踏査で確認した北側斜面の帯郭状平場の存在は、残された地名とともに館との関係を強く示唆しているものである。

館の年代については、昭和30年の調査でその下限について線引きされた。今回の調査では前回と同年代を示す15~16世紀の中国青磁・白磁破片とともに、新資料として17~18世紀の肥前産染付破片が数点出土した。小枝指氏は、永祿・天正期の激動のなかで鹿角四頭の系譜をひく土豪が次々と鹿角を去る時、盛岡南部藩士として盛岡へ移り住みながらも、中世伝来の知行を近世幕末期まで引き継ぐことは「南部盛岡藩諸士御給人等知行所書上」によって知られている。

このように、江戸期の陶磁器の出土や近世文書から、小枝指館は永祿・天正の激動、「館崩

し」による館の改築、廃棄という経過をへながらも、ある程度の機能をもちながら幕末まで継続していたものと考えられる。なお、小枝指氏が当地に下向し、築城した時期、経過については資料が極めて少なく、新資料の増加を待つところである。

市内に所在する大規模な館跡については、近年の研究によると館跡を構成するすべての郭が同時期に構築、使用されたものではなく、長期間を要し、構築、廃棄を繰り返し、その結果として広い範囲を占地するに至ったものと考えられている。小枝指館についても「古館と新城」の存在、二重空堀の一方を埋め立て平場を作り出すこと等は、上記の経過をたどってのことと考えられる。しかし、「館崩し」によってどの程度の廃棄、改築が行われたのかは、今後の課題とするところである。

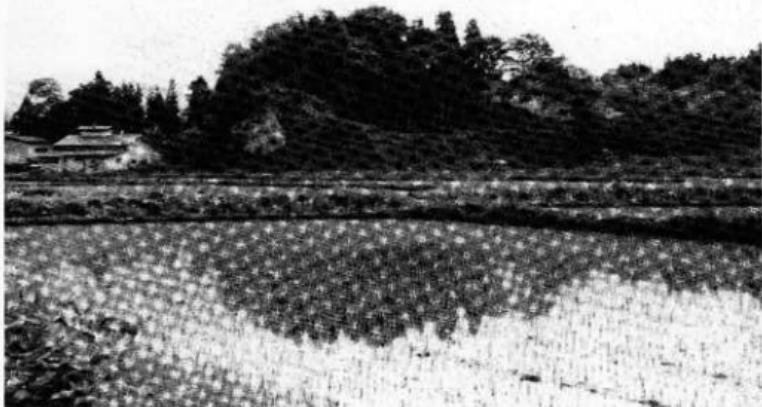
(藤井安正)

引用・参考文献

- 文化財保護委員会 「大湯町環状列石」 1953年
- 東京大学東洋文化研究所 「館址・東北地方における集落址の研究」東京大学出版会 1958年
- 秋田県教育委員会 「下藤根遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第39集1976年
「鳥野遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財報告書第49集 1978年
「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ」「湯瀬館遺跡」
秋田県文化財調査報告書第78集 1981年
- 鹿角市教育委員会 「一ツ森館跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書197集 1990年
「鹿角の館 一館跡航空写真測量調査報告書(1)」「小枝指館」
鹿角市文化財調査資料20 1982年
「新斗米館跡 鹿角市新斗米館跡第Ⅰ次発掘調査報告書」
鹿角市文化財調査資料14 1980年
「新斗米館跡 鹿角市新斗米館跡第Ⅱ次発掘調査報告書」
鹿角市文化財調査資料16 1981年
「下砂沢遺跡発掘調査報告書」 鹿角市文化財調査資料40 1990年
「秋田県鹿角市遺跡詳細分布調査報告書」
鹿角市文化財調査資料39 1990年
- 鹿角市 「鹿角市史 第Ⅰ卷」 1982年
- 佐々木達夫 「陶磁」『日本史小百科29』 近藤出版 1991年
- 安村二郎・片岡正一他「鹿角地方の城館 航空写真測量調査に關連して」
「よねしろ考古 第4号」 よねしろ考古学研究会 1988年
- 桜田 隆 「鹿角地方の城館 考古資料より」『よねしろ考古 第4号』
よねしろ考古学研究会 1988年
「鹿角地方に於ける古代土器群の様相」『研究記要 第2号』
- 秋田県埋蔵文化財センター 1987年
- 小松正夫 「秋田県の土師器について」『考古風土記 第2号』 1977年
栗村知弘 「天正期の根城～破却（城わり）の実態について～」
『八戸市博物館研究紀要 第5号』 八戸市博物館 1989年
- 庄内昭夫 「鹿角地方の土器」『秋田考古学 38号』 秋田 1984年



P L 1 小枝指範跡



館跡全景 (SW▷NE)



館跡全景 (S▷N)

P L 2 小枝指館全景



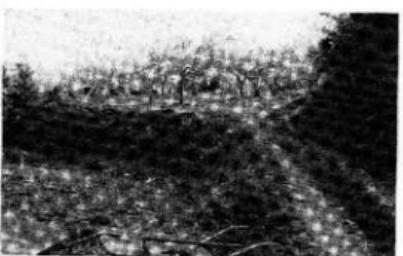
館跡全景 (N ▷ S)



第Ⅰ郭



第Ⅰ郭・基地間の空堀



第Ⅱ郭南側腰郭



基地とⅢ郭間の空堀



第Ⅲ郭・N郭間の空堀

P L 3 館跡全景・各郭



第VII郭



第VII郭東側空堀



上ワ町（E区）



イタコ塚



作業風景



A区東側調査区

P L 4 各郭・作業風景



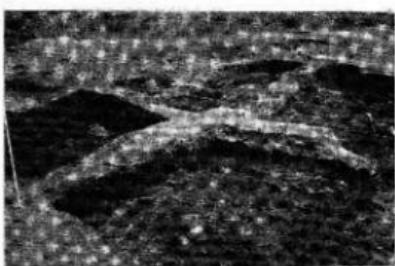
第101号竪穴住居跡土層



第101号竪穴住居跡



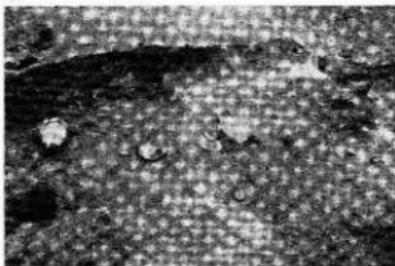
第102号竪穴住居跡



第102号竪穴住居跡土層



第102号竪穴住居跡カマド



第102号竪穴住居跡遺物出土状況



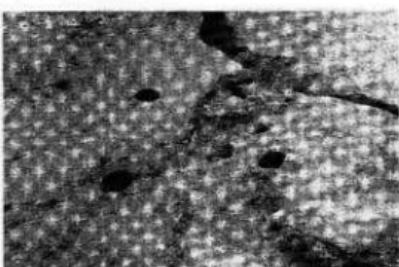
第103号竪穴住居跡



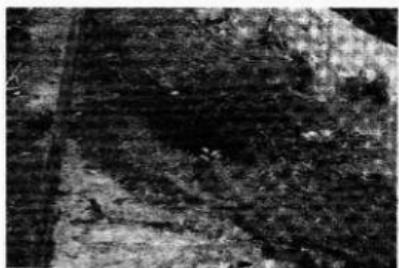
第103号竪穴住居跡カマド



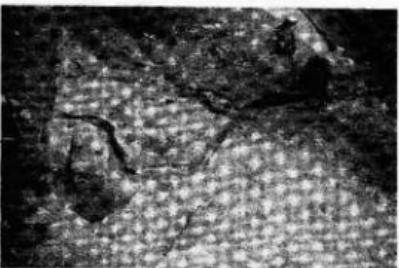
第104号竪穴住居跡



第101号建物跡

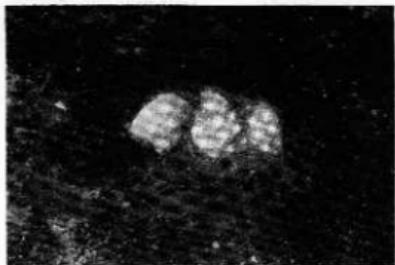


第102号建物跡

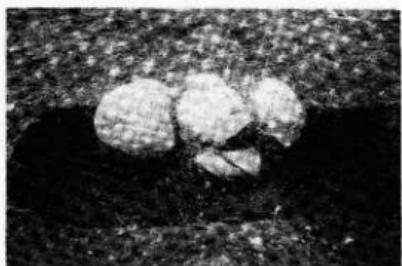


第101号・102号溝状遺構

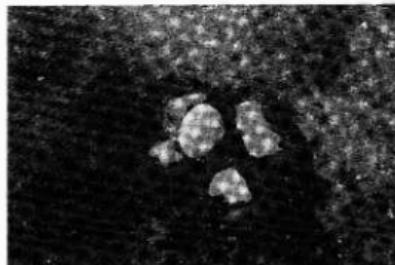
P L 6 A区竪穴住居跡・建物跡・溝状遺構



第102号建物跡 Pit 1



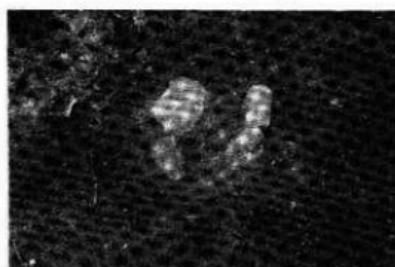
第102号建物跡 Pit 1



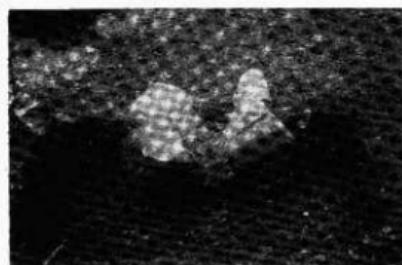
第102号建物跡 Pit 2



第102号建物跡 Pit 2



第102号建物跡 Pit 4



第102号建物跡 Pit 4

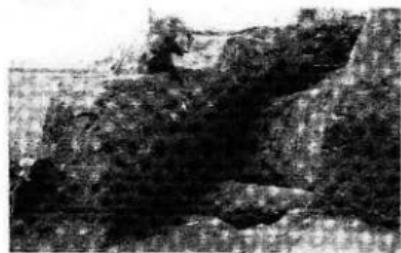
P L 7 第102号建物跡



建物跡Pit 1



A区西端部の土壘状施設



A区西端部



A区物見台上面

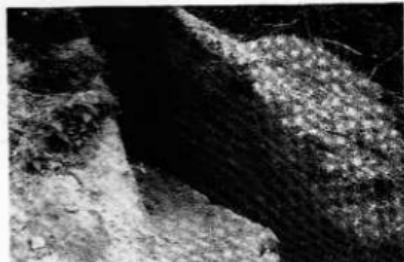


A区東部トレンチ



B区トレンチ

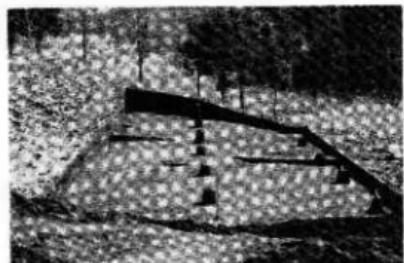
P L 8 A区西端部、B区トレンチ



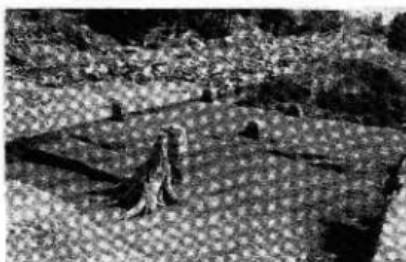
B区トレンチ



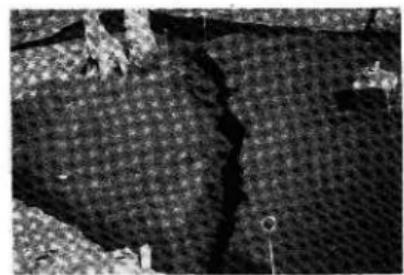
C区全景



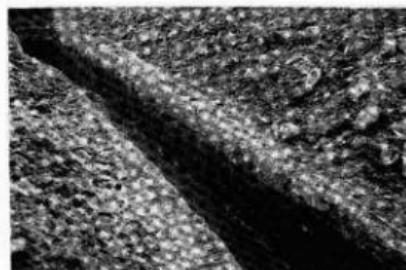
C区東部



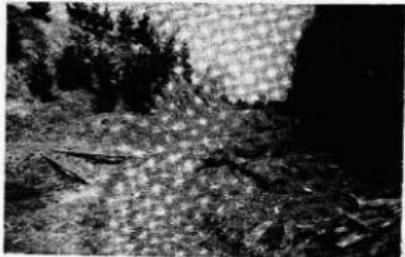
C区西部



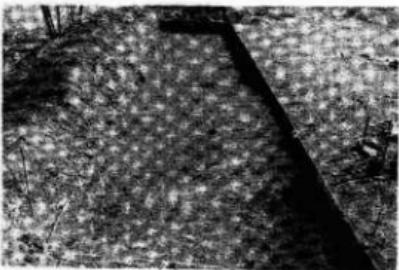
第301号溝状遺構



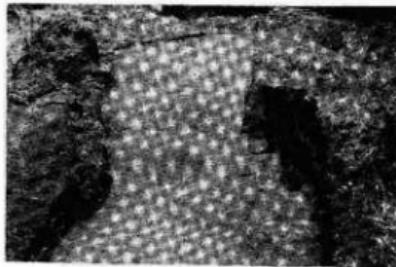
土層観察用トレンチ



D区全景



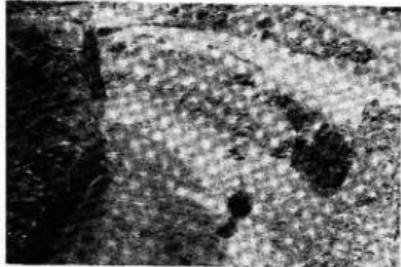
D区南部



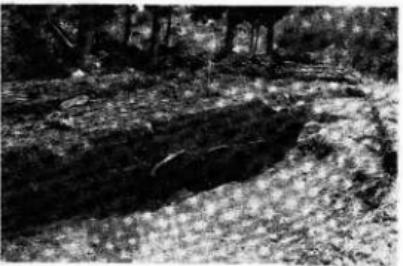
D区南部



D区南部土层



第402号空堀



第402号空堀土層

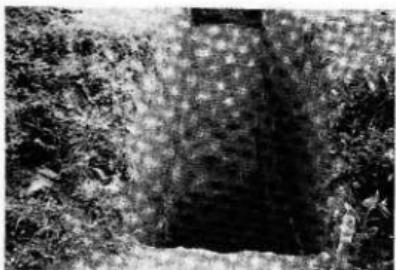
P L 10 D区全景、第402号空堀



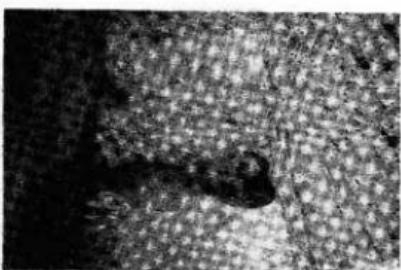
第402号空堀・腰郭



第Ⅱ郭東側帯郭・a トレンチ



b トレンチ



a トレンチ内の溝



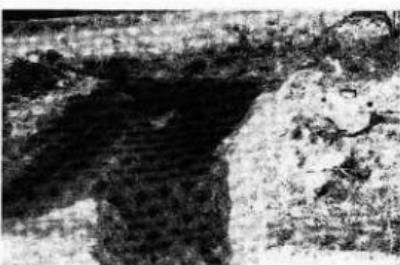
a トレンチ土層



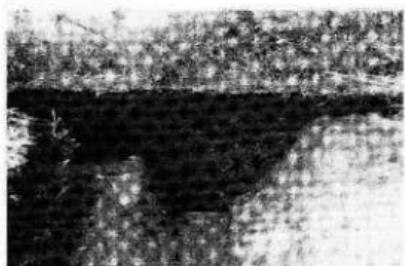
第Ⅱ郭上面



E区 a・b トレンチ



第501号溝状造構



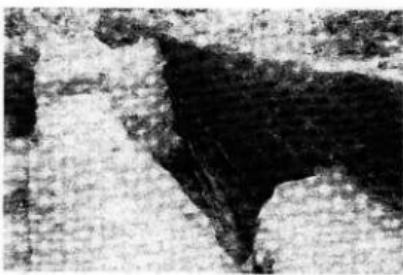
第501号溝状造構土層



上ワ町台地斜面段築



c・d・j トレンチ



j トレンチ土層

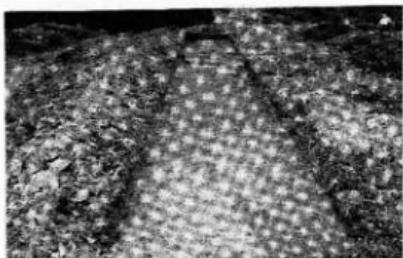
PL12 a～d・j トレンチ、溝状造構



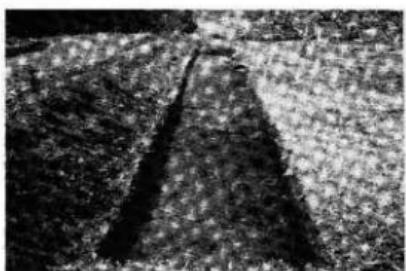
e トレンチ



f トレンチ



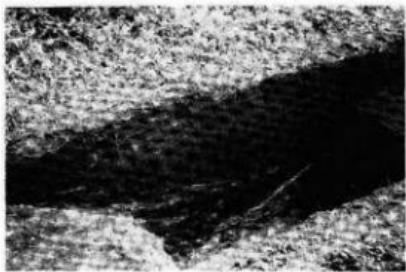
g トレンチ



h トレンチ

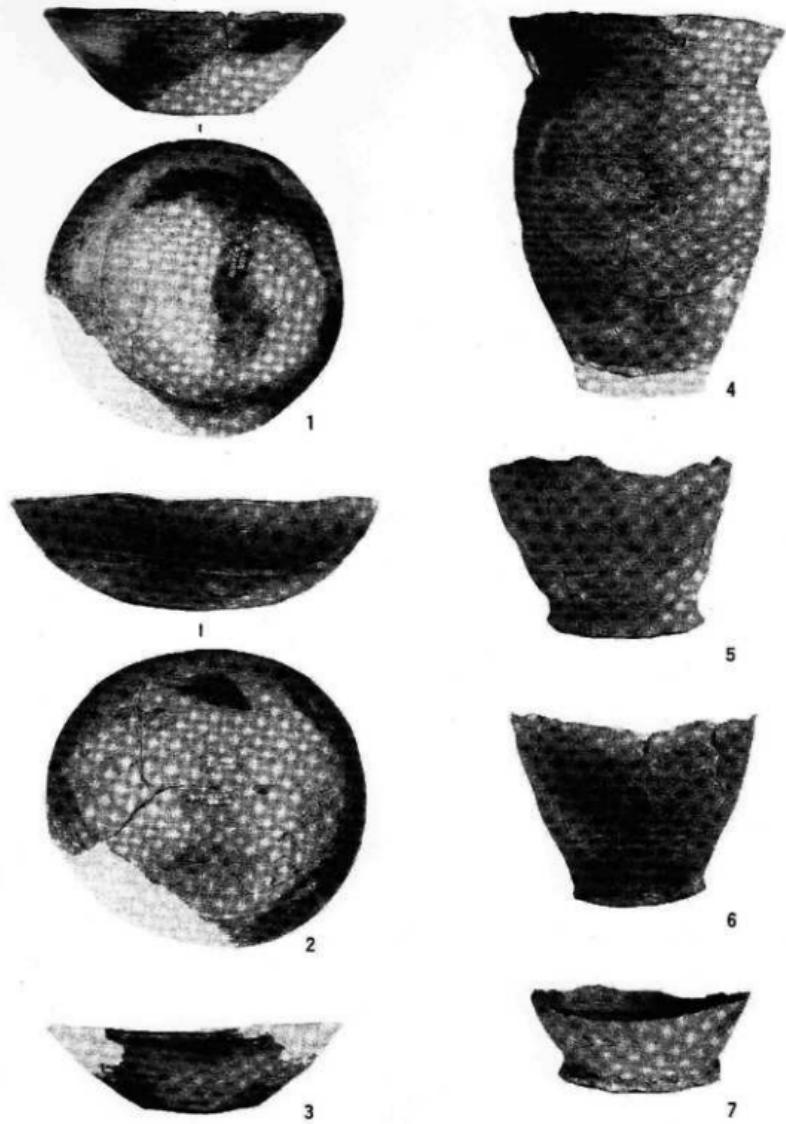


k トレンチ



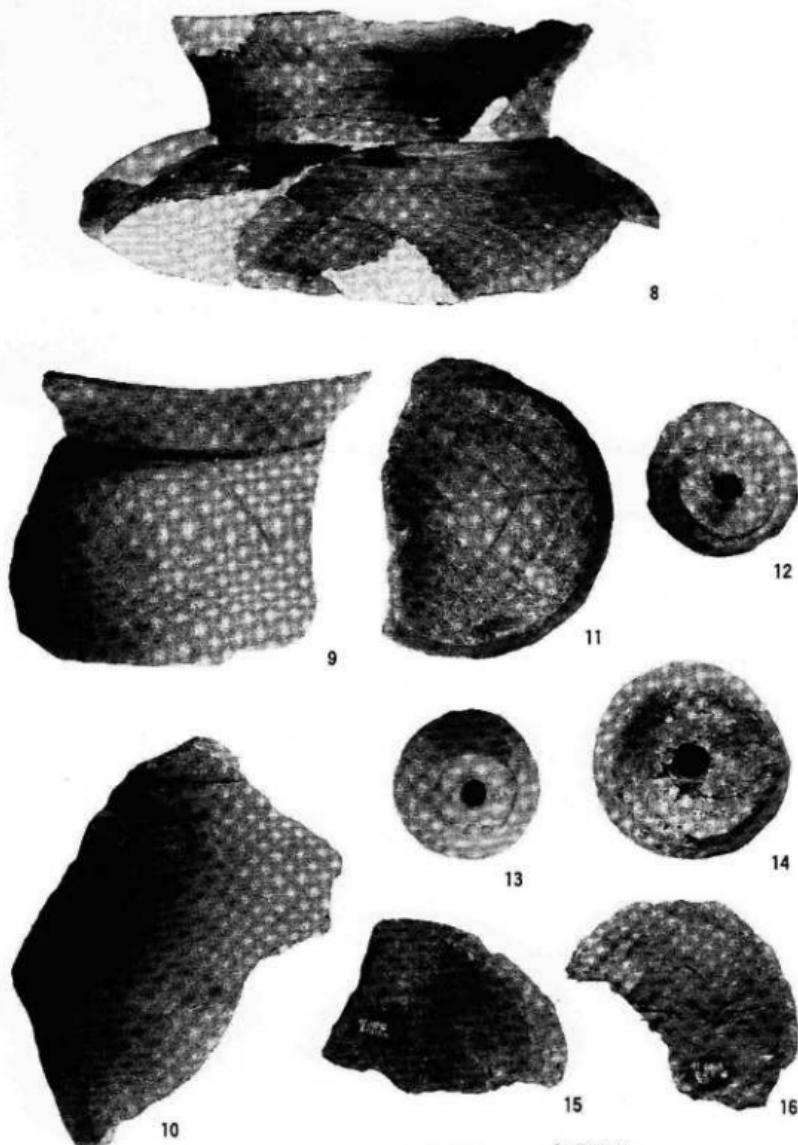
k トレンチ土層

PL13 e~h・k トレンチ



1—7···61 102

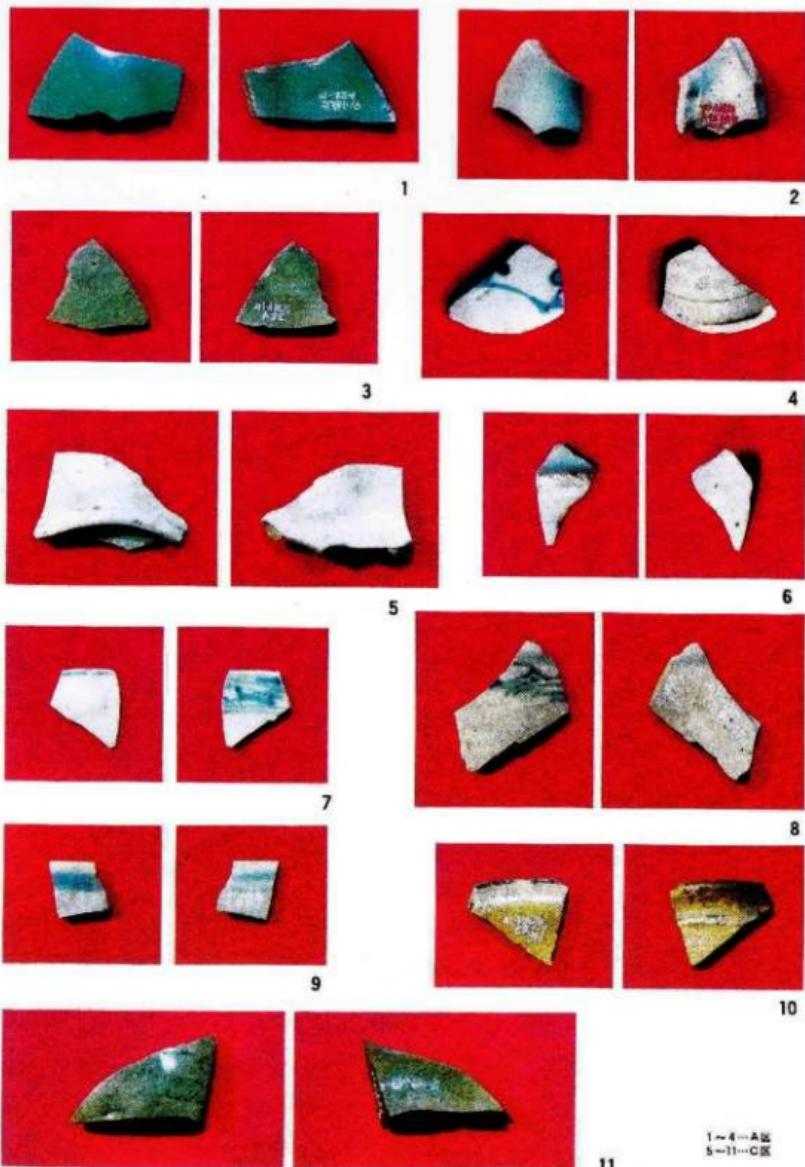
PL 14 出土遺物(1)



PL 15 出土遺物(2)

8~14···SI 182
15···SI 181

16···D區



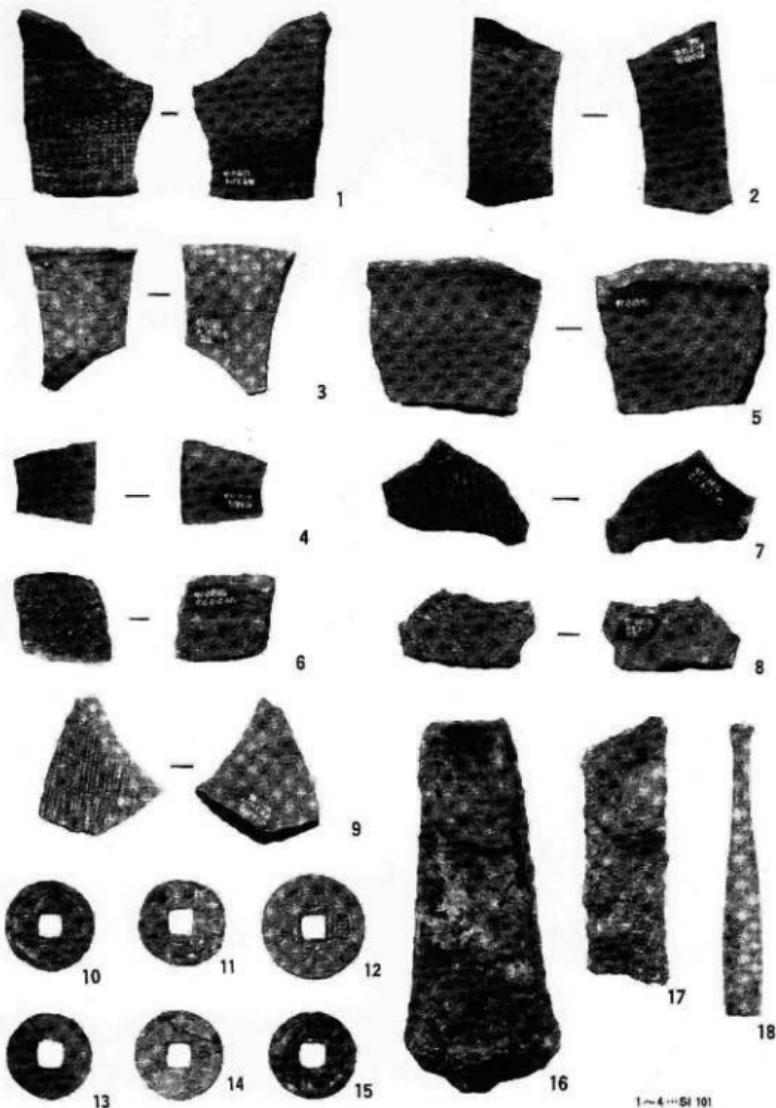
1~4…A区
5~11…C区

P L 16 出土遗物(3)



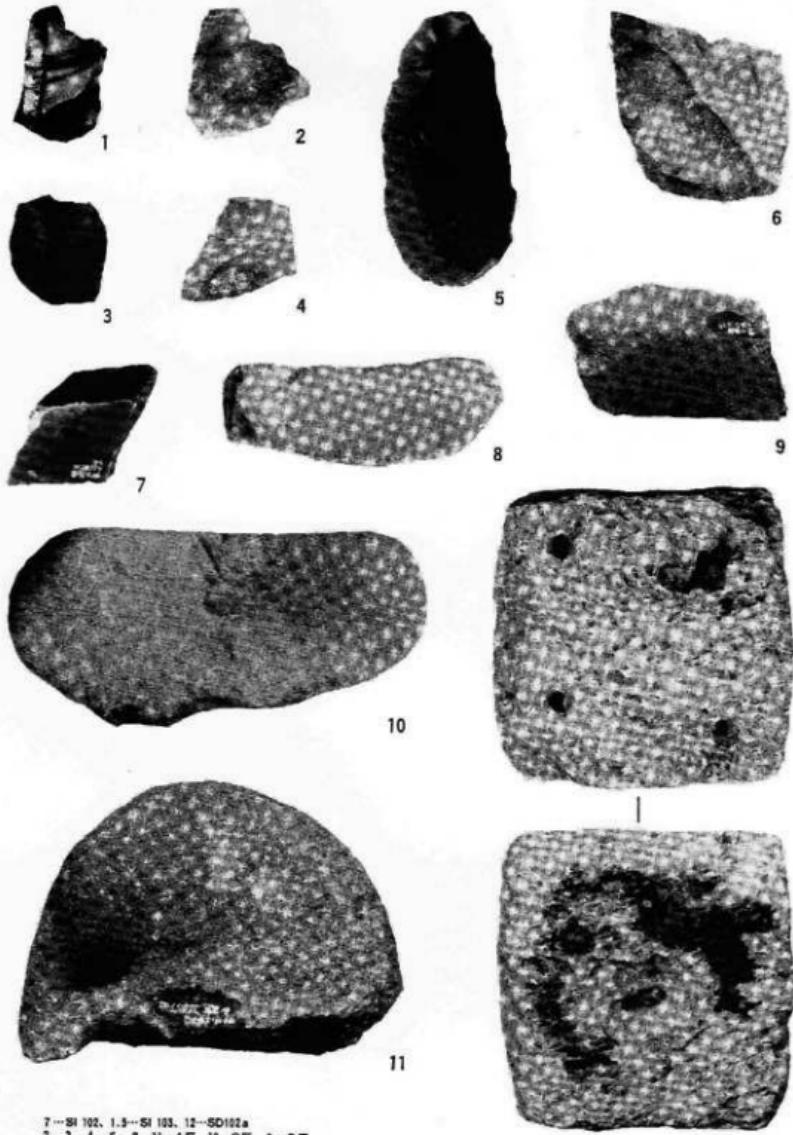
P L 17 出土遺物(4)

12~15···C区
13···C区50301
16~19···D区
20~21···E区



1~4…SI 101
 5~A区
 6、7、10、11…C区
 8、12、13、16~18…D区
 9、14、15…E区

P L 18 出土遺物(5)



7—SI102, 1, 3—SI103, 12—SD102a
2, 3, 4, 6, 8, 11—A区 10—C区 9—D区

P L 19 出土遺物(6)

鹿角市文化財調査資料 44

小枝指館跡発掘調査報告書

発行年月日 平成4年3月31日

発 行 者 鹿角市教育委員会

〒018-52 秋田県鹿角市花輪字荒田4-1

TEL 0186-23-5111

印 刷 所 (有)大館孔版社

〒017 秋田県大館市谷地町後60